
天使に愛の歌を

雪村 静馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使に愛の歌を

【Nコード】

N3923U

【作者名】

雪村 静馬

【あらすじ】

僕と舞は姉弟でありながら、同時に恋人でもある。

誰にも知られないように時間を育んでいた二人だが、友人と思っていた七瀬が僕に告白したことで、運命の歯車が回りだす。

愛し合っているにも関わらず、舞と一緒にいることができなくなり・
・。

? prologue

? prologue

クスクスと声を潜めた笑い声が薄暗く狭い部屋に広がっていった。真夜中をずいぶんと過ぎた冬の日。白い壁を背にして、足の先から頭の天辺まですっぽりと毛布で覆った僕らは、互いが互いを温めるようにして体を寄せ合っていた。一つしかない小さな窓から見える金色の月はとても綺麗で、冷たくて、どこまでも澄み切った空に作り出した光輪。神々しいまでに輝くそれが、闇に沈んだこの部屋まで薄明かりで照らしていく。

「智也^{ちや}。もし、世界が明日終わってしまうとしたら、あなたは何を願う?」

隣で何が楽しいのか笑っていた彼女は、内緒話をする時のように、ぴつたりと体を寄せてそう言った。

「明日世界が終ってしまいうなら、何を望んでもしょうがないんじゃないの?」

「また、そんな夢のないことを言う」

不満そうに下唇を持ち上げる彼女。それが彼女の癖であることを僕は知っている。ずっと一緒にいて、ずっと彼女を見ていたからこそ、分かることだ。

僕は少しでも考えを巡らした後、やっぱり最初に思いついたことに行きついて、でも、それも仕方のないことだなと思った。

「僕は、舞^{まい}の幸せを望むよ」

それが僕の思いつくただ一つの望みだから。

「明日世界が滅びてしまうのに？」

「うん」

「舞は？」と僕は訊ね返す。

彼女は一瞬真剣な顔をした後、

「私もいっしょ。智也の幸せを願うと思う」と言った。「智也が泣かないように、悲しくないように、苦しくないように、笑っていられるように、幸せでいられるように・・・きっと、私は願うと思う」

僕より頭一つ分だけ小さい彼女の頬が肩に当たって、僕は少しでも彼女がきつくない様に場所を調整する。二人の足が温もりを求めるように交差し、布ずれの音が微かにした。

「そっか、僕ら二人がお互いの幸せを望むのなら、たぶん二人とも幸せになれるだろうね」

「明日世界が滅びてしまうのに？」

「うん、きっと」

それは確信に近い予感。世界が滅びることよりも、君が泣いていくことの方が僕にとっては辛いからだ。きっと、君が幸せであれば僕も幸せでいられるだろう。

「二人の幸せか・・・」

膝を抱えるようにして自分の身体を丸めた彼女。毛布で唇を隠すように下を向いたから、長いまつげが金色に輝いているのを見つけた。栗色の髪からはシャンプーの香りがして、同じものを使っているはずなのに特別な香りのような気がしてしまうから、なんだか不思議に思えた。

「ねえ、智也」と首を斜めに傾けて、彼女はその美しい横顔で僕に問いかける。「私たちは神様にも背いているというのに、幸せになることなんてできるのかな？ 願う相手がいないというのに、願いは叶えられるのかな？」

グイグイと頭で僕の肩を押す彼女。

小さな窓が外の冷気でカタカタと音を立てる以外は、まるで世界には僕と彼女しかいなくなっただんじやないかって思えるほどの静寂が支配していた。お互いの息遣いさえ感じられるほどの静寂。その静かで冷たい冬の部屋で、彼女の体温を強く意識する。

「神様なんていないし、いたとしても望みをかなえてくれるほど暇じゃないよ」と僕は外を見つめながら言った。

同時に肩に感じていた力が弱まる。

「そう言えば、智也は神様とか、昔から信じてなかったわね」

「うん。偶然が必然と重なって偶然を呼び、その偶然が奇跡と呼ばれる。ただそれだけだよ。だから、奇跡が起こることもないし、祈りが聞かれることもない」

「じゃあ、智也は誰に願うの？私が幸せであるように・・・」

僕は彼女の形のいい瞳を見つめながら、やっぱり不安で仕方がないのだと分かった。神にも背いている僕らを、社会は受け入れてはくれないだろうから。この世界は受け入れてくれないだろうから。だから、どこにも居場がないなら、彼女は僕が守らないといけないんだと強く思った。

「僕は望むんだ。願うんじゃない。望んだことは努力するからね。奇跡なんてものに頼らなくなつて、必然が偶然を、偶然が必然を呼んでくれるさ」

「それって、智也が私を幸せにするってこと？」

「ああ、僕以外に舞を幸せにすることのできる奴なんていないだろう？それがたとえ神様でも僕は負ける気がしないよ」

だって、誰よりも君が好きなのだから。愛しているのだから。全能な神がいたとしても負けることはないさ。

「じゃあ、私も智也を幸せにしてあげる」と彼女が笑った。

「頼もしいね」

僕が君の居場所になり、君が僕の居場所になつてくれる。なら、この世界が僕らを受け入れてくれないとしても、寂しがることなんてこれっぽっちもない。むしろ、僕らの方から世界を必要としないくらいだ。だって、僕の世界は彼女なのだから。だから、彼女さえ傍にいてくれれば僕は何も望むものはないのだ。そう、彼女さえい

てくれれば……。

「姉さんは後悔してない？」

僕は急に感じた儚い感覚に突き動かされてそう言った。

「何を？」

月に照らされた薄明かりの中で、彼女は静かにそう訊く。琥珀色の瞳が一瞬だけ揺れたような気がして、その色の深さに吸い込まれそうになる。

僕はゆっくりと言葉を区切るようにしながら、一音一音、まるで話ができるようになったばかりの子供のように重たい口を開いた。

「僕と……付き合っていることを、後悔してない？」

姉弟でありながら付き合っていること、愛し合っていること。それを彼女は悔いてないだろうか？その不安はこういう静かで冷たい夜に襲ってくるのだ。静かだから、寒いから、隣にある温もりの大切さを噛みしめさせられて、いつか失ってしまうんじゃないだろうかという不安が心を締め付けてくる。

「僕と罪を犯してしまったことを後悔している？」

情けない、と自分でも思った。今、彼女が僕を幸せにしてあげると言ってくれたばかりじゃないか。それなのにもう、彼女を失うことを恐れている。彼女がどこか遠い場所に行ってしまうような気がして、もう手の届かない場所に消えてしまうような気がして、不安に駆られてしまっている。でも、どうしても、そう訊ねずにはいられなかった。

「そうね」彼女は貝殻のような自分のピンク色の爪を撫でながら、
「後悔がないって言う嘘になるわ。だって、そうやって智也を苦しませてしまうことになっているのだから」と言った。

そんなことはない、慌てて否定しようとしたけれど、それを遮るように人差し指を僕の唇にあてると、彼女は小さな子供に教える時のようにゆっくりと優しい声で微笑する。

「私たちは苦しんだ。私も、智也も……。そして、私たちは誰からも祝福されない未来しか持っていない。だから、罪の意識はあるし、もし地獄と言うところがあるなら、私と智也は一緒に落ちてしまっただろう。だから、後悔はずっとし続けれると思う。これで良かったのか？ 智也にこんな人生を背負わせることになって良かったのか？ って」

小さく息を吐き出した彼女は、「でもね……」と困ったように笑って言ったのだ。

「私は智也を愛してしまった。そして、智也も私を愛してくれた。それならどんな後悔も、苦痛も、侮蔑も、嘲笑も、きつと笑い飛ばせると思うの。私はきつとずるいから、何よりも智也から愛してもらったことを望んでしまっ」

カタカタと音を立てる窓。外には綺麗な月が輝き、闇一色の空にうす明りを投げていた。僕はただその明りを見つめながら彼女の言葉を反芻する。幾度も幾度も。

愛した相手に愛されたいと願うことがそんなに罪深いことなのだろうか？ そんなにずるいことなのだろうか？

倫理と感情。それは光と闇のように相反するもので、常に二人の

関係を問い続けるのだろう。離れても感情が引き裂かれ、一緒にいても倫理が邪魔をする。どこにいても自分を責め、相手に許しを請い、そして触れ合うたびに心が痛むのかもしれない。それでも僕らは一緒にいることを選んだのだった。

「もし、舞がずるいというのなら、僕も同じだよ。姉さんが好きになっちゃった。そして、愛する人に愛されたいと願っちゃった。それをずるいというのなら、僕もずるい人間なんだ」

でも、「智也はずるくないよ」と彼女は言う。「だって智也ほど真っ直ぐで公平な人はいないもの。私があなをたぶらかしたのよ」

妖艶な笑みを浮かべて見せる姉さんは、やっぱり似合っているかった。どこまでも純粹で真っ白な女性。それが彼女だから、僕をたぶらかすなんてこと、とてもじゃないけどできないと思う。人からしてみればヒキ目だとか、恋は盲目ということになるのかもしれないけれど、僕はそう言うのを差し引いても彼女ほど澄んだ瞳をした人はこの世界にはいないと信じているのだ。

「ねえ、智也。手、繋ごつか？」

毛布の中で繋がる手と手。二人の指が互いに絡み合い、ゆっくりと結ばれていく。ひんやりとした感触に彼女が冷え症だったことを思い出して、包み込むように彼女の手をできるだけ優しく握り締めた。

「智也の手、あったかい・・・」

「姉さんの手は冷たいね」

静まりかえった部屋の中で、唯、彼女の息遣いが聞こえてくる。
窓の外には金色の月。闇にぽっかりと浮かぶそれを見て、僕はなん
だか切なくなつた。

舞みたいだ。そう思つてしまつたから。

この闇のような世界でたつた一つ穏やかな輝きを放つ月。それは
僕にとつての彼女のようだった。だから、月の傍に寄り添う光がな
いことが切なくなる。

「智也？姉さんって呼ぶの、もうやめてくれないかな？」

僕が一人で考え事をしていると、彼女にしては齒切れが悪くそう
言つた。

「どうして？」

「だって、私は智也の姉さんじゃなくて、恋人でしょ？」

「うん」

「だったら」彼女は恥ずかしそうにうつむいた後、「いつも『舞』
つて名前を呼んで、姉さんじゃなくて・・・」と言つた。

僕は小さな彼女の手を少しだけ強く握り返して、
「分かつた。舞は僕の恋人だからね」と微笑する。

空気がひんやりと澄んで寒い夜。僕らは互いに体を寄せ合つた毛布
の中で、静かに話をする。まるで世界から隠れているように。まる
で世界を恐れているように。でも、僕の隣には彼女がいたから、こ
れ以上にないくらいに安心していられたんだ。

「智也・・・」

彼女が僕の名前を呼べば、何だってできる気がした。彼女の小さな笑顔を守れるなら、何とだって戦える気がした。だから僕はこの胸に溢れるくらいの愛しさを込めて彼女の名前を呼ぶのだ。

「舞、ずっと傍にいて」と。

窓から見える月の傍には、かすかに星が瞬いていた。

? December・24 (1)

冷たい風の吹きつける街。レンガで舗装された歩道を蹴りながら、僕は月を見上げた。薄い雲が金色の輝きを覆うように流れていき、瞬く星が銀色の光を放つ。闇に沈んでいる部分はどこまでも深く、黒い色をしているというのに、月や星は決して飲み込まれることはない。それはあたりまえかもしれないけれど、特別な事のように感じるのだ。もし、僕に絵の才能があつたなら、この月と星を迷わず描いているのだけれど、と少し残念に思う。

「今日が何の日か、皐月くんは知っている？」

そう僕に聞くのは、同じ学部の子瀬香織。たまたま同じ授業を取っていたのもあって、大学に入学してすぐに話すようになった女子の一人だった。

「さあ・・・」

祝祭日に疎いと、いつも頬を膨らませる舞の顔が浮かんで、僕はぼんやりと今日が何月何日だったか思い出そうとする。なのに、七瀬は僕が思い出す前に、

「今日は十二月二十四日。クリスマスだよ・・・」と、呆れたように教えてくれた。

「そういえば、そうだった」

「クリスマスイブを忘れるなんて、皐月くんくらいだと思う」

頭一つ小さい彼女。隣を歩く彼女を見ると、器用に片方の眉を

あげて見せてくれた。同時に長いポニーテールが左右に大きく揺れる。

「明日がクリスマスだってことは覚えていたんだけど、今日がクリスマスイブだってことは忘れてた」

「なにそれ」

彼女のブーツがレンガを蹴り、あまり人通りの多くない街路に足音がこだまする。ヨーロッパの街並みを思わせる街燈の下で、カッン、カッンと、時を刻むように音を立てる。

「私たちの歳なら、イブのほうか、普通、大事なんじゃない？」

「何で？」

「だって」七瀬は、分かってないと言わんばかりに溜め息をつく
と、

「恋人と過ごす素敵なクリスマスイブを、普通は期待するじゃない？ だから、恋人がいればわくわくしながらイブを待つし、いなければ、それはそれで意識してしまうでしょ？」

「どうして、恋人がいなのにイブを意識するわけ？」

彼女は一度僕の顔をポカンと見つめると、呆れたと言わんばかりに額に手を当てる。

「だって、羨ましいと思うじゃない、普通。あっちでもこっちでもカップルが幸せそうにしているのを見て、恋人のいない自分には関係がないと思っても、ついついイブを意識してしまう。意識しない

ようにしていることが、かえって意識させるのよね」

「そんなもんかな」

「・・・そうよ」

本当のところ、彼女の言うことは分からないでもなかった。もし、舞と一緒にクリスマスイブと一緒に祝うことができたなら、僕にとっても特別な日になっていたのかも知れない。でも、舞はクリスマスが嫌いだったから、僕らには関係のない行事となっていた。

確か一緒に暮らすようになって、初めて迎えるクリスマス。僕らは一つ違いだから、僕が中学二年、姉さんが三年の時。家でクリスマスの準備を始めようとしていた僕は、姉さんに呼び止められてこう言われたのだ。

「智也くん？　クリスマスが何の日か知っている？」と。

当然プレゼントがもらえる日としか思っていなかった僕は、その由来なんて考えてもみなかったわけで、

「サンタクロースがくる日・・・かな？」と何とも幼稚な答えを返したのだった。

当時、まだお互いが一緒に暮らすようになって間もないころだったから、突然できた美人の姉さんとクリスマスを楽しむことで、少しでも仲良くなれたらという気持ちもあったと思う。なのに、姉さんはいつになく真剣な顔をしたかと思うと、

「クリスマスはキリストの誕生日なの。智也くんはクリスチャンじゃないでしょ？　私も、私たちの両親もクリスチャンじゃない。なら、どうしてクリスマスを祝うのかしら？」と僕に訊いたのだ。

今まで当然のように祝ってきたクリスマス。実際は皆がしているから同じように騒いでいただけで、何も考えていなかった僕は姉さんのその言葉に面くらってなにも言えなかったのを覚えている。

そして、彼女は聖母のように優しく瞳を細めると、

「だから、敬虔なクリスチャンたちが大事にしているクリスマスを、私たちが面白半分に祝ってはいけないと思うの」と言ったのだ。

その日から、僕の中でクリスマスは無くなった。正確にはそのあるべき姿になったとも言えるかもしれない。神聖な、自分とは関係のない日へと。だから、本当はクリスマスも、クリスマスイブも、その日付を全く意識していなかったのだ、僕は。

「皐月くんは彼女、いないの？」

隣を歩く七瀬の突然の質問に、僕はドキリとする。

「いないよ。知ってるだろ？」

だって、いつも七瀬とは顔を合わせているのだから。

「高屋さんと、最近仲いいけど・・・付き合い出したわけじゃないの？」

「全然違うよ。確かに最近よく話すけど、そんなんじゃないよ。実際、僕はクリスマスイブに七瀬と帰路を急いでるわけだし」

分かるだろ？ と両肩をあげて見せる。

「確かにそうね」

彼女はそれで満足したのか、さらに追及しようとはしなかった。

「それこそ、七瀬は彼氏とかいないの？ 結構、人気あるみたいだけど」

そう尋ねた僕に、彼女はさっきの僕を真似てか、
「分かるでしょう？」と両肩をあげて見せた。

それは、七瀬に彼氏が出来れば僕にもすぐに伝わる、ということだろう。まあ、よく一緒にいるのだから当たり前か。

改めて横を歩く彼女を見る。目立ちのはつきりとした顔は、可愛いというより美人。小柄で細身のスタイルは、僕からするともっと食べたほうがいいという気になるが、そこがいいと言う奴もたくさんいる。左右に揺れるポニーテールは彼女の性格に合った髪形で、サバサバしていて割と話しやすい七瀬によく似合っていた。正直、うちの学部で気になる女子を上げると言われたら七瀬香織の名前を上げる奴は多いと思う。なのに、それを鼻に掛けない気安い雰囲気は、さらに彼女の人気を高めることになっていた。まあ、つまりは悶々とした恋心を七瀬に抱いている奴は多いというわけだ。

「ああ、世間はイブで浮かれていますっていうのに、私は淋しく明かりのついていない家に帰らないといけないのか・・・その点、皐月くんは実家通いでいいわよね」

「そうかな？ 逆に僕は一人暮らしをしている奴のことが羨ましいけど・・・」

「そう？　こんな人恋しい夜に一人暮らしは悲惨よ」

そう言うとな彼女は困ったように笑って、

「私も彼氏、作っちゃおうかな・・・」と独り言のように僕の一步前を歩く。

「七瀬ならすぐにできるんじゃない？　結構、気になるって奴も多いし」

「そう・・・好きな・・・くん・・・ね」

突然、冷たい風が僕らの間を吹き抜け、ぼそぼそと早口で言った彼女の言葉は夜の街に流されていった。

「今なんて言ったの？」

そう訊きなおした僕に、七瀬はまた困ったように笑って、

「何でもない」と首を振る。

洒落た街燈の下で伸びた二人の影。真っ黒に引き伸ばされた二人はカツカツと足音に合わせてレンガを蹴っていく。一歩先を歩いて行く彼女の後を追うようにして、僕はスニーカーを前に進めた。

「ねえ」

ちょうど二人の家の分岐点に差し掛かった時、七瀬はいつもの「また明日」と言う代わりに、金色の月を瞳に映しながら、

「海を見に行かない？」と僕を誘った。

それは、独り言を言う時みたいに、小さく感情の読めない声だった。

たから、なんだか彼女が迷子になった子供みたいに思えた。

『淋しく明りのついていない家に帰らないといけないのか・・・』

彼女のさっきの言葉を僕は何故だか思い出して、胸のあたりが苦し
いような、ざわざわした妙な気持ちになる。

「冬に海は寒いと思うけど・・・少しだけならついて行くよ」

大きく引き伸ばされる二人の影。僕は再び歩き出した彼女の左右
に揺れるポニーテールを眺めながら、カツンカツンと時の刻まれる
音を聞き続けるのだった。

? December・24 (2)

「こうしていると、世界の果てにいろような気がしてこない？」

そう言ったのは七瀬だった。

見渡す限り広がる海、海、海。目の前に広がるその広大な景色と、波が静かに歌う音が、この場所にはあふれていた。天を仰げば金色の月が輝きを増し、銀の星が笑っている。僕はゆっくりと首を一回転させた後、

「世界の果てがもしあるとすれば、こんなところなのかもしれないね」と答えた。

僕らは立ち並ぶ住宅の間を抜けた浜辺に腰をおろして、膝を抱えるようにして溜め息を吐く。

黒い海が空の星や月を映し、波が揺れるたびにキラキラと輝きを放つ。それはまるで海の中に町があるみたいで、何とも言えない美しさだと思う。

キラキラ……。

ユラユラ……。

水面で屈折した不思議な光が乱反射して、神秘的ともいえる輝きを作り出す。ただここには美しさがあつて、僕らが知っている場所とも思えないほどに、懐かしく、暖かく、そして、哀しかった。

「人は、あまりにも綺麗なものを見てしまうと、哀しくなるのはどうしてなんだろうね」

隣に座る七瀬に問いかけるでもなく、僕は独り言のようにそう言

葉を落とした。

「そうね」彼女は自分の薄い唇に人差し指を当てた後、「それは人間が美しくありたいと願っているから・・・、求めているから哀しくなるのかもしれないよ」と言う。

人が美しくありたいと願うから。だから、哀しくなる。

なんとなく分かるような気がして頷く僕を、彼女が星のちりばめられた瞳で見つめる。

「自分の嫌なところとか、他人の嫌なところを見つけて・・・。少しずつだけど私たちは大人になるにつれ、『この世界が思っていたほど綺麗じゃなかった』って気づくんだと思う。でも、こうして本当に綺麗な場所を知ってしまうと、まだ望みはあるんじゃないかって思えるの。でも同時に自分の無力さも知ってしまう。だから、哀しくなるんじゃないかな？」

白い横顔が僕に同意を求め、海からの冷たい風に髪がさらわれる。僕は何度か頷いて見せながら、

「なら、大人になるって言うのは哀しいことなのかな」と訊いてみた。

「うつん、私はそうじゃないと信じている」

そう一言で締めくくった彼女。でも僕はその言葉が妙に心地よく感じて、同時に嬉しかった。

信じている。

短く、何の根拠もない言葉だけど、一番説得力のあるような気が

したから。

「臯月くんは人を好きになったことがある？」

七瀬は水平線の向こうに浮かぶ月を眺めながらそう僕に訊いた。
どうしようもなくその人に夢中になったことはあるか、と。

「うん」

「そっか・・・」

姉でありながら恋心を抱いてしまった僕。それは、はじめから運命で決められていたかのように、自然と惹かれていた。だから好きになったのがいつかなんて、僕には分らない。気がついた時には、舞に夢中だったのだ。

「私も、好きな人がいるの」

七瀬は時折吹きつける風に、長いポニーテールを流しながらそう言った。

「好きで、好きで、たまらないのだけど、その人は私を見てくれないくて・・・。他に好きな人がいるみたい」

「僕の知っている奴？」

「まあね」

歯切れ悪く笑う七瀬。彼女は小柄だから、そう言う笑い方をすると全体的に幼く見えることがある。

「今まで、あんまり何かを願ったりしたことはなかったんだけど、そんな余裕もなくなってきたかも」

だって、私を全然見てくれないから……。と七瀬は繰り返す。

「誰だろう？ 僕が知っていて、彼女がいて、七瀬に『全く』興味がなさそうな奴？」

「そうそう。でも、まだ彼女ではないみたい。私が見た感じでだけ」

「ん……。全然分かんないや」

「だろうね」

そう彼女がどこか残念そうに笑ったから、僕はその相手のことがすごく気になってしまったのだと思う。自分にできることがあったら協力してあげようという気になったから。

「一体、誰？ 良かったら相談に乗るよ」

「相手は内緒。それに皐月くん恋愛の相談なんてできるの？ その手のことは『超』がつくほど鈍いでしょう？」

僕だって彼女居るんだけど。

喉まで出かかったこの言葉を飲み込んで、代わりにあいまいな微笑を返す。

僕と舞が付き合っていること。それは誰にも言うことのできない

秘密。いつまでも秘密にするわけにはいかないし、できるとも思っていないけれど、少なくとも今は誰にも洩らすべき事じゃない。それは僕ら二人の暗黙の了解。

「まあ、確かに鈍いかもしれないけど、話を聞くくらいはできるから」

「うん、ありがとう」

銀色の輝きを見せる彼女の睫毛。伏し目がちな七瀬のそれは、まるで涙で潤んでいるみたいに光っていた。

もし、僕にできるのなら、二人の間を取り持つてあげてもいいのに。七瀬とその男ならば、僕らのように世間に遠慮しなくてはいけない間柄ではないのだろうし。何よりも、七瀬が喜ぶのなら、僕も嬉しいから。

「ねえ」そんな思案をしていると彼女は、「一つだけ訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」と言った。

特別何かを訊くのに、断りを入れないといけない仲じゃないのに、改まってどうしたのだろうと思いつながら、僕は頷いて見せた。

「皋月くんは運命を信じる？」

運命。

それが彼女からの問。

その問いかけが一体何を意味しているのか、七瀬がどういつつも

りでそう言ったのか分らないまま、僕は答えていた。

「誰かに決められた道筋を運命と言うなら、それはないと思う。でも自分が何度人生をやり直しても、その同じ決定に至ってしまうことは運命と呼べると思うよ」

「そっか。たとえば、皐月くんがこうして私と一緒にいることとか、学食のＢランチばかり注文することとか、みんなシャーペンを使っているのに鉛筆を愛用していることとか？」

おどけたように言ってみせる七瀬。少し上目づかいに覗きこまれる瞳が笑う。

「そうそう、よく知ってるね。全部、僕の運命だよ」

「運命もいろいろだね」

「七瀬は、運命はあると思う？」

潮の香りが混じった冷たい風。ザザァンという大きな波の音がして、気泡がはじけていった。

「運命はあるんだと思う。でも、私にやってくるのは難しい運命かな。恋人になれそうにない人との出会い・・・とかね」

「それはまだ分からないよ。これから、その人が七瀬のことが好きになるかもしれない」と僕は言った。

「うん。そうだいいけど、私は勇気がないから。振られてしまうくらいなら、友達でいる方を選ぶの。あとは彼からの告白を待つし

かないんだけど、その見込は全くないしね。だから、私にやってくるのは難しい運命なの」

出会ったことは必然で、後悔もしていないのにもどかしい。それが私と彼の運命なの。

七瀬はそう言って、片方の眉をあげて見せた。

「でも」と僕は微笑した。「難しいからこそ運命と呼ぶに値するのかもしれないよ。だって、僕の鉛筆愛用の運命なんか、七瀬に言われるまで気付かなかったし、そのうちシャーペンになることもあると思うから」

難しいからこそ、やり遂げたとき、本当に大切な運命になるんじゃないかな？

僕がそう言って、七瀬が自分の長いポニーテールをそつと撫でた。

潮の香りを運んで行く冷たい冬の風。簡素な住宅が立ち並ぶこの海岸線は静かで、ポツポツと窓から漏れる明かりが、石造りの防波堤と洒落たベンチをぼんやりと浮き上がらせていた。

そして、小さな無数の星と大きな一つしかない月。

本当にここは世界の果てなのかもしれない。つい、そう思えてしまう場所。寂しくて、美しく、哀しくて、優しい。

ザクツと音を立てて、隣に座っていた七瀬が立ち上がる。ブーツの踵が銀色の砂の中に沈み、サクツと小気味のいい音をもう一度立てた。

「ユキ・・・」

「えっ？ 何？」

そう訊き返した僕に、彼女は幼い子供のような微笑を浮かべて、小さく言った。

「雪が降ってる」と。

まるで、大きな音を出したらそれが消えてしまふみたいに、人差し指を唇にあてて、瞳で僕の視線をさらう。

「本当だ・・・雪が降ってる」

真っ黒な空から落ちてくる純白の雪。それは一瞬天使の羽じゃないのだろうか、と思ってしまうほどゆっくりと、ゆっくりと僕らのところに舞い降りてくる。月の光の中、星の瞬きの中、ひたすらゆっくりと・・・。

「ホワイトクリスマスだね。あつ、今日はイブだから、ホワイトクリスマスイブか」

七瀬がかすれた声で、でも嬉しそうにそう言った。

「寂しがり屋の七瀬に、運命からの贈り物かもしれないね」

「なにそれ？」

「さあ？」

僕は銀色の砂浜で顔を合わせる。七瀬のポニーテールに一片の雪が止まって、僕のマフラーに止まって……。それがとっても綺麗だった。

「きつとき、今日はいいい気分で眠れる気がしない？」と七瀬が訊く。

「そうだね。きつとそうだと思うよ」

「運命もたまにはいいことするね」

「たまには、いいことしてもらわないとね。七瀬の運命は気難しいみたいだし」

クシュと笑う七瀬。やっぱりその笑みは小さな子供みたいで、でも、そんな顔をする七瀬はなんだか綺麗だった。

金色の月と銀色の星。静かな海はそつと歌を唄って、冷たい風が潮の香りを運ぶ。そんな世界の果てみたいなこの場所に、雪がちらほらと降り始めていた。

天使の羽みたいだね。

そう初めに言葉にしたのは、僕だったろうか、それとも彼女だったろうか。そんなことも忘れてしまうほど、僕は小さな輝きに見とれていた。

? December・25 (1)

*** : ***

七色のステンドグラス。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が背中から差し込んでくる月明かりを透過して、ある物語のワンシーンを作り出していた。

ちょうどベールを頭からかぶった女性が、両翼の羽をもつ男に赤子を授けられようとしている場面。光臨がいくつも描かれていて、大事そうに母親の手にだかれようとしている子供は一際輝いていた。僕は小さなその子供が、人類史に残る聖人となることを知っている。

「もう、ミサは終わりましたよ」

祭壇の前。七色の光を栗色の髪に写しながら、彼女は僕を見つめる。大きくて深い瞳。蝋燭の明かりで小さく揺れる輝きに、吸い込まれるんじゃないかって気になる。

「いえ、僕はクリスチャンじゃないので」

「そうなんですか？」

「ええ」

「クリスマスの夜に、クリスチャンでもないのに教会へ来たんですか？」

「まあ、そう言うことです」

変わった人ですね、と微笑した拍子に、彼女の来ていた白いコートが揺れて、ブーツが床をコツンと叩く。

「ここは何もありませんよ」

「でも、あなたがいます」と僕。

「私しかいません」

「僕もいるじゃないですか」

一瞬瞳を見開いた彼女は、細い指で口元を覆うと楽しそうにクシユツと笑った。

「確かにあなたも、私もいますね」

「ええ」

静かな夜だった。ただ、静かで何もなく、死んでしまいそうなくらい寒い冬のクリスマス。

見上げると高い吹き抜けの天井が音を拾い、僕らの立てる音が幾重にも響き合い、広がっていった。

さつきまで多くの出席者で埋まっていただろう長椅子も、今は冷たい沈黙をまとい、荘厳な音色を奏でるはずのパイプオルガンも、彼女の背に隠れてしまっている。

「あなたの名前を訊いてもいいですか？」と彼女は言った。

「智也……皐月智也です」

「智也さん・・・」

「そうです」

彼女は一度首をひねった後、なんだか懐かしい感じがすると、自分の胸の前に両手を重ねた。

「どうしてでしょうね？」

あなたの名前を聞いてこんなに胸が苦しくなるのは。そう言っただけで、でもそれは居心地の悪いものではなかった。だから僕は、ゆっくりと彼女を見つめながら言った。

「あなたの名前も教えてもらっていいですか？」と。

クリスマスの夜。

七色の光に包まれた彼女に、僕はもう一度再会することになった。唯、静かで優しく穏やかな夜。どこまでも寒い空気の中で、僕の胸は炎が宿ってしまったみたいに、ドクン、ドクンと沸騰する。

彼女は小さく口を開いて、また閉じる。それを幾度か繰り返したあと、忘れていたその単語をやっと思ひ出したのか、ゆっくりと何かを確かめるようにして言った。

「私は、マイ・・・皇月・・・舞です」と。

：

世界には幾千もの神様がいるそうだ。なら、幾千もの祈りがささげられても、それを叶えることができるのかもしれない。けれど、仮に六千人が一つずつ何かを願ったとして、それが叶えられたとしても、それは世界にいる人間のうち、ほんの0・0001%の願いしか実現しないことになる。

だから、と僕は言った。

「もし、神に何かを願ったって、それが叶えられたりはしないんだよ」

「でも、その0・0001%に入るかもしれないよ、私たちの願ったことが・・・」

「そうだね」

僕は頷いてから、

「でも、あまり期待はできないと思うのが普通じゃないかな?」と言った。

クリスマスの夜。一般的に聖夜と呼ばれる日に、僕と舞は公園のベンチに座っていた。ちょうど頭の上には大きな楓の木があつて、時折吹いてくる風に枝が凧いでは、ザワザワと静かにあたりを震わす。

「やっぱり、智也は夢がないと思う」

そう言った姉さんは下唇を不満そうに持ち上げて続ける。

「どうして、そういうことを言うかな。願ったら叶えられるかもしれないと思った方が楽しいじゃない？」

「そうかな？ そう思ったら、努力しなくなってしまうよ、僕ら人間は」

はあ、とため息をついて見せる舞。呆れたように両方の眉を寄せると、

「それとこれとは別よ。努力は努力でして、願いは願いでしてみる。そして、願いがかなったらラッキーだと思うの。そののどが悪いの？ 何でも平衡をとることが大事なのよ」と困ったように笑う。

それは、まるで母親が子供に教え諭す時のようで、僕は少しだけ自分が恥ずかしくなってしまう。

二人の間を通り抜ける冷たい冬の風。

僕らは身をすくめながら、お互いの温もりを求めて身体を寄り添わせる。

「確かにそれも悪くはないね」

僕がそう言って姉さんが笑う。

「でしょ」

どっちの考え方が正しいのかなんて、分からない。本当は祈りや願いは叶うのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。でも、

舞が叶うというのなら、それもいいんじゃないかという気になる。

全く、一つしか歳はかわらないのに、この差は何なんだろう？

そう思ったら、苦笑が漏れた。

目の前にある公園の噴水には、クリスマスだからだろうか、虹色の照明が投射されていて、小さな飛沫がクリスタルのように輝いて見える。いつも昼間に見かけるコンクリート色が嘘のように、とても華やかな光で人目を惹きつけていた。

「もう、智也と出会って五年になるんだ。早かったね・・・」

掠れる声と七色に揺れる舞の瞳。僕の脳裏には五年前の、初めて出会った時の姉さんの姿が浮かんで、懐かしいような苦しいような気持ちになる。だって、きっと僕は舞に初めて出会ったときには、もう恋に落ち始めていたんだと思うから。そう、僕の初恋はずっとあの時のまま続いている。

「はじめまして、皐月舞です。今日からよろしくね、智也くん」

そう言って、玄関で手を差し伸べてくれたのは舞だった。当時中学生だった僕は、以前の学校で可愛いと噂されていたどの女の子よりも綺麗な彼女に、ハッキリ言っただけでかなり動揺していた。それに、急に聞かされた母さんの再婚にも自分でもわからない苛立ちを感じていた時だった。どうしようもない感情と理性の間で、幼い当時の僕は途方に暮れていたのだと思う。だから、せつかく差し伸べてくれた舞の手を握ることなく、思春期特有の気恥ずかしさと苛立ちにまかせてぶっきらぼうに言ったのだ。

「はじめまして」とだけ。

新しい親父はできた人で、正直、母さんが惚れるのも無理はないと思った。女手一つで子供を育てることが今の世の中では大変だったことぐらい、分からない歳でもなかったし、母さんが自分の幸せを考えてもいいと僕は思っていた。けれど、頭では再婚のことは納得できていたのだけれど、心は落ち着かなかった。

だから、僕は新しく引っ越してきた親父の家の中で、物置になっていた狭い三階の部屋を貰うことにした。舞は、自分の部屋と交換することを勧めてくれもしたが、かたくなにその部屋にこだわった。だって、一階の両親の部屋から、一番離れていられる場所だったから。少しでも二人の顔を見なくて済むこの部屋を、好んだのだ。

でも、そんな理由で選んだこの部屋は、案外悪くなかった。なぜなら、一番静かで空が綺麗に見える場所だったから。窓は小さいのが一つしかついてないけれど、そこから見える青は、邪魔されるものが何もなく格別だったのだ。

「今までこの窓からの景色に気付かなかったわ。智也くんは空とか、好きなんだ・・・」

僕の部屋に来た舞は、そう言って小さく笑った。

「まあね。嫌いじゃないよ」

「私も好きだな、そう言つの」

「姉さんも？」

「ええ」

狭いから、何もない部屋。小さなテーブルとベッドと本棚。コンポやCDはもちろんなくて、生活感のほとんどない部屋だったけれど、僕は結構気に入っていた。

そのベッドに二人で腰かけて話をする。

「きっと、智也くんはすぐに新しい学校にも溶け込めると思うわ。でも、もし困ったことがあったら、遠慮なく私に言ってね。あなたは私の弟なんだから、いつでも助けに行くから」

「うん」

すぐ隣でそう優しく微笑する舞は、当時の僕にとって、とても頼もしく思えたのを覚えている。

今より少しだけ幼い舞。

けれど、僕にとってはどんな大人よりも優しくて大きく見えた。

なのに、素直じゃない僕は、自分でも真っ赤になっているのを自覚しながら『ありがとう』の一言も言えなかった。それでも、気を悪くすることなく手を差し伸べ続けてくれた舞に、僕はとても感謝しているし尊敬もしている。

「あの時は緊張していたのかもしれないなあ」と、隣で虹色の噴水に見とれている舞に言った。

「あの時？」

「そう、舞と初めて会った時」

「突然新しい家族ができたんだから、誰だって緊張するよ」

右の耳に髪をかけながら、彼女は微笑する。

私だって緊張していたんだから。

「でも、僕が緊張したのは、舞のせいだと思う」

だって、と僕は続けた。

「突然綺麗な姉さんができて、しかもあんなに優しくったんだ。声をかけられるたびに嬉しさ半分、恥ずかしさ半分だったと思う」

一瞬舞は、キョトンと何を言われたのか分らないという顔をした後、クシュッと笑って見せて、

「智也くん・・・可愛いね」と言った。

そう、僕は幼くて、未熟で、可愛かった。

それまで、自分の部屋に女の子を呼ぶなんてことがなかった僕は、すぐ隣に座って話をする舞を意識せずにはいらなかった。狭くて倉庫みたいな部屋が、姉さんが来るだけで花が咲いたように明るくなった。彼女から時折する甘い香りに、頭の奥がしびれてしまうような心地の良い痛みがして、穏やかなで澄んだ声に心が大きく跳ね上がった。

「もう、あの時には舞を好きになり出していたのかもしれないし、

少なくとも憧れくらいの気持ちはあったのかもしれないね」

「そうなの」

「うん、きっとそうだと思う。僕の一番の味方は、ずっと舞だし」

「私は」彼女は一度素早く瞬きをして、「・・・私は、智也の良いお姉さんをしていたかしら？ 智也が不安で仕方ない時に、確り支えられたかしら？」と訊いた。

美しい横顔が七色の光を受けながら、僕に問いかける。ザワザワと静かに凧いだ枝をチラリと見上げて、僕はそっと彼女の指を絡めとった。

「僕にはもったいないくらい、いい姉さんだよ。ありがとう」

「ん」

満足そうに微笑する舞。僕はできるだけ優しく彼女の手を握る。まるで、繊細なガラス細工のように、儚く純粋な雪のように、そっと力を込める。

これからは、と舞の瞳を僕は覗く。

「僕が、姉さんを支えるから。今までずっと支えてくれた分、今度は舞の恋人として僕が支えるから」

形のいい彼女の双眸が少しだけ揺らめき、そして、嬉しそうにクシャッと子供のように笑う。

「ありがとう」

もう僕は、あの時の幼い僕じゃない。姉さんにただ憧れて、恥ずかしくて、いつも赤くなっているだけの僕じゃない。だから、今度は僕が姉さんを守らないといけないし、頼ってもらえるように努力しないといけない。

舞が悩んだ時、迷った時、僕が一番に力になってあげられるようにしっかりとしないではいけない。

ぼんやりと漂う夜の雲を見上げながら、僕は心にそう誓った。

「ねえ、あそこのクレープ屋さんに行ってみない？」

「クレープ屋？」

舞の視線を追うと、可愛い洒落た車を改造したクレープ屋がパステルの屋根をあげていた。よく、遊園地とかでありそうなやつだ。

「ね、いこー！」

僕の手を引く舞。無邪気に笑う彼女の笑顔がいつまでも曇ることがないように、もっと彼女に相應しい人間にならないといけない。

七色の噴水を背に、僕は空いたもう一つの手を強く握り締めたのだった。

? December・25 (3)

「どうして、外で買ったクレープは家のよりおいしいんだろうね？」

煉瓦作りの歩道を蹴る。僕の隣で機嫌よくしている舞は、先ほど買ったクレープに上機嫌だった。

「さあ、気分の問題かな？」

「あつ、それはあるかもしれないね」

ヨーロッパの街並みを思わせる街燈が影を並べ、こじんまりとした洒落た住宅が軒を差し出していた。僕は一步前にある舞の影の先を見ながらスニーカーを進める。

「智也とこうして二人で歩くのって、いつぶりかな？」

形のいい、飴色の瞳が僕にそう訊いた。

「きつと、数か月ぶりくらいかな」

「だよね、すつごく久しぶりの感じがするもん」

「そうだね」

「智也、大学のレポートとか、講義とか、忙しかったもんね。それに、私も色々あったし」

溜息を吐くように彼女が言って、僕は頷いた。

静かなクリスマス。僕らには何の関係もない夜だったけれど、いつもとは少しだけ違う街の様子は、今日が特別な夜だと思いだすには十分だった。

仄かな明かりと、楽しそうな笑いの漏れるオレンジ色の窓。

イルミネーションでかたどったサンタとトナカイがチカチカと輝いて、ちよつとしたカーニバル見たいだった。

こんな日もいいな。

そう、思えてくる。

少しだけ特別で、幸せな日。たぶん、日頃は過ごすことのできない時間を取り戻している家族も、このオレンジ色の窓の向こうにはいるのかもしれない。

「智也？」

そんなことを考えていると、不思議そうな顔をした舞が僕を覗き込んで言った。

「智也はクリスマスが気になるの？」

「まあ、気にならないっていったら嘘になるのかもしれないけどね。でも、昨日まで忘れていたことだし……。友達も呆れてたくらいだし」

「そう」

フワリと舞うワインレットのコート。カッンと煉瓦をブーツが叩いて、栗色の彼女の髪が曲線を描く。

「クリスマスにデートって恋人みたいね」と舞は言った。

「うん、本当はイブが恋人の日らしいけど」

「そうなの？」

「うん」

それは、昨日七瀬に教えてもらったこと。

それなら、と彼女は続ける。

「一日遅れの恋人の日だね、智也」

飴色の瞳。それが嬉しそうに細められて、ドラマの女優みたいに腰を屈める。だから、なんて絵になる女なんだろうって、僕は思ってしまった。薄い艶やかな唇からは貝のような真っ白い歯がこぼれて、僕はこの世界で一番素敵な人に見とれてしまう。

舞。

僕の姉。

そして、僕の恋人。

僕は彼女のこの瞳が大好きだ。

深くて優しく、どこまでも澄み切ったこの飴色の瞳が。

「智也？」

「ん？」

「どうしたの？」

いつまでも動こうとしない僕を不思議に思つて、彼女がそう訊く。

僕は自分でも苦笑とも、照れ隠しも分からない曖昧な笑みを浮かべながら言った。

「舞に見とれていただけだよ。綺麗だなんて」と。

一瞬何を言われたのか分らなかったのか、動かなくなった舞は、ハッと僕から顔を背けると早足で歩きだした。

カツン、カツン……。

カツ、カツ、カツン。

僕もそれに合わせるように歩幅を広げる。

「どうしたの？」

一歩先に行く舞にそう訊くけれど、まるで僕を無視するように前を見つめて足をゆるめようとしなない。

彼女の刻む音に合わせて揺れる栗色の髪。たくさんのイルミネーションの中を弾むように広がって、僕はそれを掴むように伸ばした手で細い肩に触れた。

弾かれたように振り返った舞。

彼女は夜でも分かるくらいに、耳まで真っ赤にしていた。

「どうしたの？」

何度か、瞬きを繰り返した彼女は、少しだけ唇を震わせると、僕にしか聞こえないくらい小さな声で言った。

「恥ずかしいけど、嬉しいの」と。

僕はその瞬間、この胸に溢れんばかりの愛おしさが込み上げてきて、弾かれたように小柄な体を力一杯抱きすくめる。

「キャ・・・」

小さな抵抗の聲が聞こえたけれど、止まることはない。どうしようもなく愛おしくて、切なくて、胸が痛いくらいに舞が欲しかった。

「智也・・・」

どうして、この女は僕のことが好きでいてくれるのだろう？ 誰もが振り返るくらい綺麗で、可愛くて、僕には決して手の届かないような人なのに・・・。なのに、この世界で一番素敵な女性は僕の恋人でいてくれる。

「舞」

「智也・・・痛いよ」

「うん」

「痛い・・・」

「うん、ごめん」

腕に込めた荒々しい気持ちを静めて、今度は出来るだけ優しく、そつと彼女の背に腕を回す。

「僕、舞のこと、好きだ」

「うん」

それは心の底から絞り出したような言葉。今、全ての人に言ってしまうにかった。この人は、舞は、僕の愛する人なんだって。『彼女』と言う言葉ではとても表現しきれない。あえて言うならば、『運命の人』と言う言葉が一番いいのかもしれない。そのくらい、僕は舞に惹かれている。でも、それは内緒の関係。

「私も、智也が好きよ」

「うん」

クリスマス。

人々に幸せを贈る一年に一度の特別な日。

それはこんな形で僕を幸せにしてくれた。自分には関係のないと思っていた日なのに・・・僕は幸せだった。

「ねえ、ねえ、智也」

僕の肩に顔を埋めるようにしていた舞が、耳元で、掠れる声で言った。

「雪が降ってるよ・・・」

見ると、ゆっくりと羽のように地上に舞い降りてきている雪。それが舞の肩に止まり、髪に止まり、そして、溶けていく。

「本当だ」

僕らはびつたりと抱き合ったまま、静かな住宅街の角で息をひそめる。まるで、大きな音を立てたら、その儚い存在が壊れてなくなってしまうんじゃないかって思えたから。

「きっと、今、私たちの上を天使が通っているの」

「天使が？」

「そうよ」

舞は何故だか自信たっぷりに頷くと、

「だって、雪って天使の羽みたいじゃない？ それに、雪が降っているのを見ると嬉しくて、幸せになるでしょう？」と言った。

天使の羽・・・か。

そう言ったのは僕だったろうか、七瀬だったろうか？ 初めに言い出したのがどちらかだなんて忘れてしまったけれど、確かに僕は雪のことを天使の羽みたいだと思った。だから、
「確かにそうかもしれないね」と言った。

「あれ？ 智也にしては珍しいのね。いつもなら、こつこつのに否定的なのに」

「そうだね」

確かにロマンティストではない僕だから、いつもならそう言うのには否定的かもしれない。

でも、と僕は言った。

「今日はクリスマスだから、そう思うのかもしれない。だって、こんなにみんなが幸せそうにしている、僕も幸せなんだから。今夜は特別な日だよ」

「そっか・・・」

静かで、寒くて、でも、舞と二人なら暖かくて。

「なんだか、少しだけ恋人の日ってクリスマスが、正確にはイブかもしれないけど、・・・言われる理由が分かったよ」

「私も」

「うん」

僕らはお互いに回していた腕を静かに解き、そのまま指先を絡めるようにして手を繋ぐ。

ひんやりとした舞の手は、手の中にすっぽりと収まる大きさで、その小さな感触にそっと力を込める。

一面イルミネーションに彩られた街を、ゆっくりと歩き出す二人。

今日はクリスマス。

特別で幸せな夜。

でも、僕らはクリスチャンではないのだから、慎ましく、この聖夜を過ごそうと思う。

? R a i n y D a y (1)

*** : ***

「サツキ・・・確か、あなたも皐月さんでしたよね？」

「ええ」

「すごい偶然・・・」

そう言っただけは、可愛らしく小さな手のひらで口元を隠した。

今夜はクリスマス。

僕はクリスチャンではないけれど、この教会へと足を運んだ。そこで再開した皐月舞。彼女は昔と変わらない姿で、僕の前に立っている。

「確かに偶然かもしれない。僕と君が同じ姓を持っているのは」

だって、偶然に僕らは姉弟となったのだから。彼女の言った意味とは違いかもしれないけれど、間違っではない。

一度、自分の胸に手を当てて、気持ちを落ちつけようと、そっと深呼吸を繰り返す。自分でも緊張しているのが分かってきたから、喉が大きく鳴って、これから言う言葉を頭の中で何度もリピートした。

「そう言えば」その先手を打つように、彼女はおっとりとした柔ら

かい口調で言う。

「私、ちょっと記憶が曖昧みたいで・・・さっき、名前を思い出そうとした時も、すぐに出てこなかったし、どうしてこんな場所にいるのかも分からなくて・・・」

そんなことだろうと思った。僕は彼女の瞳を見つめながら、本当に気になっているその言葉を口にする。

「僕の・・・僕のことは憶えていますか？」

「えっ」

一瞬大きな瞳をさらに見開いた舞。高鳴る鼓動。

でも、彼女は小さくかぶりを振ると、

「知っている気はするんです。こう、胸の奥の方があなたのことを感じているみたい。でも、記憶としては、私はあなたを知らないんです」

申し訳なさそうに言う舞。

伏せた睫が蠟燭の明かりで金色に輝いて、白いコートの前で組まれた手が所在なさに動く。

「いいんです。憶えていなくても」

僕は唯、舞に会えたと言うだけで、十分なのだから。

以前はぴったりと肩を寄せ合っていた僕らの距離は、歩けば数歩

の間隔にまで広がってしまっていた。何もないタイルの敷き詰められた床。今は、その空間がひどく遠くに感じてしまう。それでも、こうして再開することができたんだ。もう、二度と会えはしないと思っていたのに……。

だから、それだけで、僕は十分だった。

「私はあなたの家族なんですか？」と彼女が訊いた。

「そうですね。でも、家族という関係は半分だけ正解です」

「半分だけ？」

彼女が僕の答えに眉を寄せる。

「僕と君は姉弟だったけれど、それ以上の気持ちをお互いに持っていました」

「え？」

深く頷いて、飴色の瞳を覗き込む。

大きく見開かれた、それを。

僕の大好きだったその澄んだ瞳を。

ゆっくりと深呼吸をするようにして息を吸い込んだ僕は、この冷たい冬の空気に白い言葉を吐き出した。

「僕と……君は……恋人でした」と。

*
*
*
:

:
*
*
*

? Rainy Day (2)

あの日の夕方は、まるでその時間だけ別の日の空をくつつけたような一変の機嫌の悪さで、レポートの提出に手間取って遅くなった僕を驚かせてくれたのだった。

朝から快晴を疑わなかったのに、急に变化した空模様。当然傘を持ってきてなかった僕は、置き傘を取りに学部控え室に向かった。

ある意味、隔離された研究室にさっきまでいたから分からなかったけれど、こうして校舎の廊下を歩いていると、その薄暗さに時間の感覚さえおかしくなってしまうそうだった。だって、いくら冬と言っても、まだ明るいはずの時間なのに、窓から覗く湿っぽい景色は、すっかりモノクロームに覆われてしまっていたから。

「一段と寒いな」

僕はそう溜め息を零しながら、ジャケットの首元を両手で覆った。進む足も、自然と先を急いでいる。そして、こんな日はマフラーをしてこなかった今朝の自分を後悔する。

暗い校舎と灰色の空。

それは寒い冬の夕方を、もっと憂鬱にしてくれるものだった。

やっと長い階段を往復してたどり着いた広い校舎の玄関口は、強く降り付ける雨音に溢れていて、湿っぽい匂いが香水のようにムツと胸を詰まらせる。

本当にひどく憂鬱だ。

この雨の中を、両肩を小さくしながら帰らないといけないのか・
。。

暗い空に溜め息一つ。重たい灰色がもつと重たくなる。

このいつ止むとも分からない雨が上がるのを、少しだけ待ってみようか、ほんの一瞬だけ考えて傘を開いた。だって、明日になったとしても、決して止みそうにないくらい、勢いよく空は泣いていたから。

「ねえ」

たぶん、靴の半分くらいは、雨の中に踏み出していたと思う。

振り返った僕を追い越すようにして、彼女は傘の中に入ってきた。長目のポニーテールが、この空模様に不似合いなくらい元気に揺れて、ふわりと甘い香りが僕の鼻腔をくすぐった。

「傘、忘れちゃったの。入れてくれない？」

七瀬は形のいい眉を片方だけ上げてそう言った。

「うん、いいよ・・・」

苦笑して二人で入るには小さい傘の半分を差し出す。

「ありがとう」

並んだ七瀬の頭は、僕の肩くらい。楽しそうに雨の中に踏み出す彼女につられるようにして、一步、また一步と灰色の空の中に僕は踏み出していった。

「全然雨が降りそうじゃなかったのにね。朝あんなに晴れていたから、いつもよりも薄着だし・・・本当にサイアク」

「本当に」

肩をすくめながらそう僕は合図地を打つ。

彼女の言う通り本当に最悪。もし、天気予報の意味があるとすれば、こんな誰もが予想できない日のためだろう。なのに、こういうここ一番の場面でことごとく予報を外して、どうでもいい日に何割かしかない正解率を使ってしまっているような気がする。

そう言った僕に、彼女は声を出して笑うと、

「それって、予報士さんたちに悪いよ」と言った。

いつも人通りのそんなに多くない道。小さな店が慎ましく営業していて、寂れているわけじゃないけれど忙しいわけでもない通り。でも、今日は激しい雨のせいで僕ら二人以外は誰もいなかった。店の明かりも幾分、この激しい雨の中でぼやけて見える。

透明な雨と、湿っぽくて甘い香り。

それは隣を歩く七瀬の匂いなのだろうか？　僕はこっそりとその香りを追う。

「ねえ、皇月くんは雨・・・嫌い？」

「え？」

彼女は自分の足の先を見るようにしながら、もう一度僕に訊く。

「雨は、嫌い？」

私は、雨、好きなんだ。

うつむいた七瀬はそう言った。

「僕は好きじゃないかも。だって、こっやって雨が降ると寒いしさ」

「そっか」

「うん」

パシャッと、音がして、僕らの靴が水たまりを蹴る。

煉瓦の隙間を縫うように細い水が流れて、坂の下へと。

「どうして、七瀬は雨が好きなの？ 雨を喜ぶ人ってあんまり見ない気がするけど」

「そうだね」

彼女は両手をコートのポケットに突っ込んだ格好で、大きくブーッを踏み出して言った。

「だって、静かなんだもん」

「静か？」

「そう」

「雨が降って、こんなに音がしているのに？」

「そう」

雨音は心を静かにしてくれるの。穏やかだった方がいいかもしれないけれど。

そう彼女は笑った。

傘に当たる透明な雫。絶え間なく続く音の連鎖は、空が灰色である限り止むことはない。僕は半分の肩を濡らし続ける雨を視界の隅に捉えて、

「やっぱり、僕は、雨は嫌いかもしれない」と溜息を吐いた。

「そう」

二人の男女に、一つの傘。やっぱり、七瀬は小柄だったけれど、二人で入るにはこの傘は小さくて、僕の右半分は空の下にさらされていた。奪われる体温に体はどんどん冷えていく。

「ねえ」と彼女。

「何？」

「臯月くんの好きな人って・・・誰？」

カツンとレンガを蹴る音が規則正しく雨音の中で響く。

カツン、カツン。

カツン、カツン・・・と。

僕はチラリと整っている七瀬の横顔を見ながら、

「七瀬の知らない人だよ」と言った。

「そっか」

それならさ、と彼女は続ける。

「その好きな人に告白は、したの？」

感情の見えない白い横顔。うつむいた前髪に少しだけ雫が止まって、震えて、落ちていった。

「いや、僕の片思いだから」

嘘を吐いた。

「そうなの」

「うん」

「それならさ」と彼女は言った。「告白、してみたらいいじゃない。イブの日に、私に言ったみたいだ。言わないと分からないこともあるわけだし」

「そうだね」

「だから、言ってみるだけ、言ってみたら？」

小さく頷いて、そうしてみるのもいいかもね、と僕は言った。

早まる雨の勢いは、空が暗くなっていくにつれてますます激しくなり、履いていたスニーカーはすっかり水をかぶってしまった。ぐっしょりと濡れた右の肩がやけに重く感じる。

「あそこで、ちょっと雨宿りしない？」

吹き付ける霧を含んだ風に顔をしかめながら、七瀬が小さなバス停を指さした。ちょうど店の途切れた場所に作られた、緑の屋根の慎ましいバス停。僕らは駆けこむようにしながら、その囲いの中に入った。

「ここなら、少し休むにはいいかも」

「そうだね」

中に備え付けられたベンチに鞆を放り出して、溜息をついた。目の前を斜めに落ちていく雨の線が、視界を遮ってしまっただけに今日の天気は強烈だ。

「臯月くん・・・肩」

彼女は僕の肩がぐっしょりと濡れているのを見つけると、大きな瞳を丸くして、慌てて自分の鞆からハンカチを取り出す。

「私を濡れないようにしてくれたからだね」

「僕は濡れても風邪引かないから、自分を拭きなよ」

押し当てられたハンカチを返しながら、そう言った。彼女だって、やっぱりこの雨の中では濡れてしまっていたから。

「ほら、なんとかは風邪引かないって言うじゃん」

「そんなこと言って、馬鹿じゃないでしょ？ 皐月くんは」

「そう？」

彼女は僕の軽口に真剣に頷くと、

「だから、風邪、引いちゃうよ」と言った。

湿っぽい雨の日特有の香りが、まるで香水のようにあたりを包んでいた。そして、そこら中の道路は、急に降ってきた大雨を受け止めて、池のようにうつすらと水を張っている。その表面を叩きつけるようにして降ってくる、雨、雨、雨……。

僕らはモノクロームの世界に置き去りにされてしまったかのように、誰もいないバス停で佇んでいた。

「そう言えばさ」

彼女は少しの間の沈黙をかき消すように、ポツリとそう言った。

「皐月くんは人魚姫のお話、知ってる？」

「大雑把なら」

「そう」

それなら、と真っ白な横顔で彼女は訊く。

「人魚姫が最後、泡になって消えてしまうのは知ってる？」

「うん」

「あれって、どうしてなんだろうね？ 別に恋が実らないからって、泡になることないと思わない？」

「まあ、そうだね」

確かに言われてみれば王子様に愛されなかったからと言って、泡になって消えてしまうというのは、物語特有の大げさな設定に思える。

「私はずっと不思議に思っていたの。どうして、人魚姫は泡になったのか・・・」

「でもね、私、分かったような気がするの」

「どうして？」

「たぶん・・・」

雨で冷たくなった体を抱きかかえるようにして、両手を組む七瀬。

「人はたった一人のヒトを愛するように、運命で決められているからだと思う」

「そう？」

「だから、人魚姫は泡になったんじゃないの。きっと運命の恋が叶わなくて、歳をとって、普通に死んだの」

それは、と彼女は言った。

「泡になって消えてしまうよりも悲しい」

叩きつけるように斜めの線を描く雨。吹きつける風は湿っぽく、煉瓦を伝う雨の甘い匂いが鼻についた。

「叶わない恋に指を咥えて老いて行くくらいなら、一瞬で消えてしまった方がまし……。だから、綺麗な終わり方に物語はしたんだと思う」

「そう？」

彼女がどうしてこんな話を始めたのか、全く分からなかった。僕は本当にこういうことには鈍感で、彼女の気持ちにさえ気づこうとしなかったから……。いつになく真剣な瞳が上目に僕を見て、彼女の色みの薄れた唇が震えていたのに、僕はそのサインをずっと見逃していたのだ。

「他に好きな人が、人魚姫もできたか……」

だから、そう言いかけた瞬間、全部の時間が止まってしまったか

のように思えた。

斜めに降ってくる雨も、バス停の屋根を打つ雨音も、風も、そして、僕らも。

だって……。

七瀬が僕にキスをしていたから。

いっぱいに背伸びをした彼女が、僕のジャケットを引っ張るように掴んで、雨で冷たくなった唇を重ねる。湿っぽい七瀬の味とひんやりとした感触が喉をくすぐり、ただそれを意識した熱が鼓動を振動させる。

カッン……。

僕の頭一つ分小さい彼女は音を立てて踵を下ろすと、潤んだ瞳を銀色の睫毛で隠して、

「ごめんなさい」と小さく言った。

モノクロームの世界。取り残されたのは僕と七瀬。

どうやら、今日の雨はまだ止んでくれそうになかった。

? R a i n y D a y (3)

「ごめん・・・」

そう言ったときの彼女の瞳を、僕は一生忘れることはないと思う。
ピクツと痙攣するように目じりが動いたかと思うと、今にも泣き出すんじゃないかってくらい、悲しい瞳が覗いたから。

でも、その悲しさはすぐに彼女の瞼に隠されて、次に開いたときは、僕にも分ってしまうくらいギリギリのプライドで溢れていた。

「何て言えばよかったんだよ」

ベッドに背中を預けて天井を見上げる。

目の前には、四角い真っ白な天井しかないのに、目に浮かぶのは七瀬の顔ばかりだった。あの瞬間の、傷ついた、どうしようもなく悲しそうな、今にも壊れてしまふんじゃないかってくらい揺れる瞳が鮮明に浮かんでくる。

「私、何やってんだろう。今の忘れて。皋月くん好きな人いるの、聞いたばかりなのに」

彼女はそう言うと、いつものように笑ったつもりだったのだろう。でも、七瀬と一緒に時間を過ごしていたのかも知れない。ほんの少しだけ彼女の声が震えているのに、僕は気づいてしまった。それは本当にギリギリのライン。

「じゃあ、また明日ね」

そう言って彼女は雨の中へと、僕の返事も待たずに駆け出して行った。いつもなら、二人の家の分かれ道まで一緒なのに、彼女はモノクロームの世界に飛び込んで、僕をバス停に置いて行ってしまった。

小さな背中だった。

斜めに降る雨に打たれながら、黒いポニーテールが揺れていた。そして、細い肩が震え、遠ざかっていく足音が雨音の中でやけに大きく響いていた。

僕はしばらく切っていない髪を片手で掴み、無造作にひっぱる。ギシツという音が背中からして、ベッドに軽く押し返された。

「もっと早く七瀬の気持ちに気づいていれば・・・」

その想いは、彼女の背中を追いかけることができない自分への後悔なのかもしれない。けれど、他に何ができたというのだろう。今思えば彼女からのサインはいくらでもあったのだけれど、僕は舞との関係に浮かれていたから、気づこうとしなかった。

「くそっ」

吐き出した溜息が、冷たい部屋の空気に触れて白く立ち昇っている。そして、まるで僕の鈍さをあざ笑うように、くるりと一回転して、蛍光灯の中に消えた。

このどろりとした黒い感情は何だろう？

悔しさだろうか？ 苛立ちだろうか？

でも、それは何に對して？

僕の自問はとめどなく続き、僕自身を責め続ける。もっと早く七瀬の気持ちに気づけていればと。

でも、果たして気づいていたからと言って、僕は今の状況を回避できたのだろうか？ いや、それは無理だったような気がする。分かっているのに避けられないこともあるのだ。

「なら、どうしたらよかったんだよ・・・」

こうやって螺旋を描き続ける問い掛けが、また七瀬の後姿を思い出させ、僕は抜けられない不安定な感情から、苛立ちをまた一つ受け取ってしまう。蛍光灯の明かりに向かって手を伸ばし、その輪郭がぼんやりと赤みを帯びるのを見つめる。

七瀬は僕が好き。僕は舞が好き。舞は僕が好き。

だから、僕と舞は恋人で、僕と七瀬は友達だった。

でも、七瀬と僕は他人で、舞と僕は姉弟。それならば、本来恋人になるのが自然なのは七瀬なのだ。だからもし、舞と僕が出会っていないければ、僕は七瀬と付き合っていたかもしれない。それは、誰にも責められず、隠さなくてもいい普通の恋で、きっと七瀬はいい奴だから、それなりにうまく行ったかもしれない。

けれど、僕と舞は出会ってしまった。

それは偶然だったけれど、その偶然が、僕が彼女に恋をするという必然を作ってしまった。それは避けられないことだ。

「考えていてもしょうがないな」

僕は上半身を起こすと、自分の膝を見る。

考えても仕方がないことを考え続けても、それは意味のないことだ。どうせ、彼女とは明日顔を合わせないといけないのだから、その時、成るようになるだろう。

『じゃあ、また明日ね』

そう言った彼女の声が、聞こえたような気がした。

? R a i n y D a y (4)

ところが、七瀬の言った『明日』はそれからなかなか訪れなかった。なぜなら、僕と七瀬はあの日からしばらく顔を合わせる事がなかったから。お互いに故意に避けていたのではないと思う。でも、どこか心の端の方で、僕は彼女の顔を見ることを恐れていたのかもしれない。七瀬の方も同じだったのかもしれない。だから、その『明日』がやってきたのは、本当に突然のことだった。

「あつ、皐月くん・・・おはよう」

お昼がもう半分以上は過ぎていたから、「おはよう」というより「こんにちは」だと思ったけれど、

「うん、おはよう」と、僕は彼女につられるように返事をした。

学内のちょうど三階と四階の間。中三階とでも言った方がいいだろうか。そのちょうど階段と階段の間の小さなスペースで、僕は突然に出くわしてしまった。大きな窓から取り込まれる太陽が作った長方形の光のタイルが、二人の影に切り抜かれるようにして灰色の床に浮かんでいた。

「元気、だったかな？」

はにかむように、気まずいこの雰囲気はどうにかしようと言葉を続けたのは、やっぱり彼女の方だった。

「うん、まあ・・・七瀬は？」

「うん、私も何とか元気・・・かな」

いくらかの沈黙が、少しだけやつれたような気のする七瀬の表情に気付かせる。でも、僕はそれを無視して、
「ならよかった」と微笑した。

実際、自分でも、何がいいかなんて分からなかった。でも、僕はそう言う以外、他に言葉を持っていなかったから、小さな声でそう言ったのだ。

階段を降りてきた何人かの生徒が、笑い合いながら僕らを避けていく。一人の女子生徒の陽気で甲高い笑い声に、何故だか苛立ちを感じた。

「あのね」と彼女は足元に視線を落として、「この間のことだけど、もう忘れてくれないかな。皐月くん好きな人がいたことは、知っていたしね。私も忘れるようにするから」と言った。

陽だまりでできた光のタイル。その中で彼女の小柄な影が揺れる。

「それでいいの？」

「うん」

チラリと視線を僕に向けて、だって、と彼女は呟く。

「この間のことで、ここところ皐月くと気まずくて、いつもみたいに話も出来なくて……。でも、それって嫌なの。自分からキス……。しといて、こんなこと言うのもアレだけど、前みたいに普通の女友達として仲良くしてくれないかな？」

見上げる瞳が僕を捕え、なんとなくそれが儚い物のような気がした。瞬きが繰り返されるたびに揺れる瞳が切なく思えて、そういう表情をさせてしまっているのが自分自身、と言う事実悲しくなる。

「きつと私はあなたの友達に戻るから」

そう言った彼女が、今にも泣きそうな小さな子供のように金色に輝く睫毛を揺らしたから、僕の心はよく分からない鈍い痛み、キリキリと音を立て始めた。

「だから、私を恋人でなくてもいいから・・・傍に居させてくれな
い？」

僕の目の前に立つ七瀬は、黒くて長いポニーテールを冬の太陽に晒して、答えを待っている。

どうしてだろう？ 彼女は どうして僕なんかを好きになったのだろう？ 気さくで、話しやすく、明るくて、優しく、可愛くて、綺麗で。 そんな彼女が僕を好きだと言う。 今まであまりに近くに居過ぎたせいで気付けなかった七瀬の気持ち。 彼女は隣を歩いて家に帰るとき、一緒に話をするとき、学食で騒ぐとき、ふざけ合って笑う時、講義で視線を合わせるとき、どんな気持ちで七瀬はいたのだろうか？

「嫌かな？」

沈黙に耐えかねた彼女がそう言った。 チラリと舞の顔が浮かんで、僕はそれに言い訳するように、友達として付き合うだけだから、
と言いつける。

だって、今までもそうだったのだから、別にやましいことをして

いることにはならないだろう？

彼女は僕にとって大事な友達で、舞は大事な恋人。七瀬もそれでいいと言っているし、何も悪いことはない。だから、

「分かった。七瀬は今でも大事な友達だと思っているから・・・これから今まで通り接するよ」と僕は言った。

「うん、ありがとう」

ホッとしたとでも言うように、コート越しに胸をなでおろした七瀬。なのに、浮かべた微笑は今にも消えてしまいそうに、引き攣ったままだった。それは七瀬の精一杯の優しさだから、僕はわざと気付かないふりをする。

「それじゃ、私、次の講義があるから」

そう言って右手を上げると、彼女は僕を追い越して太陽が作り出す光のタイルの端に消えた。日の光が届かない下への階段。彼女は一步一步ブーツを進ませ影の中に消えようとしていた。

「ねえ、皐月くん」

「何？」

「皐月くんって、『誰にでも優しいのは、誰にも優しくないと同じ』ってこと、分かってる？」

「え？」

弾かれたように振り返る僕。階段を降りようと、次の段に足をか

けた格好の七瀬がまぶしそうに僕を仰いでいた。影に沈んでしまった表情は僕からは読み取れなくて、唯、その細められた瞳が猫のように輝いて見えた。

「なんでもない。今のも忘れて」

「でも・・・」

「聞こえてないならそれでいいの」

彼女はそう言って長いポニーテールを揺らしながら階段を下りて行った。陽だまりのタイルに残されたのは僕の影。四角い窓から差し込む太陽の光を手のひらで遮って、青い空を眺める。

「『誰にでも優しいのは、誰にも優しくないと同じ』かあ」

溜息が言葉の端と一緒に出て、七瀬の後姿を思い出す。僕は彼女の小さな背中にとだけ助けられているのだろう。今回だってそうだ。本来ならば、僕の方から声を掛けるべきだったかもしれないのに、先に言葉を発したのは七瀬だった。

もし、舞に振られたとして、僕は七瀬のように強張った精一杯の笑みを浮かべて、友達として付き合う道を選ぶことができるだろうか？ たぶんそれは、心が引き裂かれてしまうほど残酷で悲しいことだろう。舞が僕に優しくする時も、怒る時も・・・誰かと恋に落ちる時も、別れる時も、いつだって自分が彼女に振られたんだってことを考えてやっていくなんて、考えただけでもゾツとするくらい辛いことだ。

しっかりと聞こえてしまった彼女の残した言葉は、その辛さから

生まれる小さな復讐なのかも知れなかった。

「人魚姫は、本当の運命の相手を見つけることができたと思うよ」

そう信じたかった。

うぬぼれもいいとこだと思うけれど、本当にそう思わずにはいられなかった。きっと僕よりもいい男が彼女を幸せにしてくれて、あの引き攣った笑みを懐かしく語れる日が来ると。

高い冬の空を見上げた僕は、いつまでも七瀬の眩しそうに細められた瞳を忘れることができずにいた。

? memories (1)

*** : ***

皐月舞という女性は、客観的に見て、『魂のひどく美しい人』だった。容姿が美しい、雰囲気優しい、声のトーンが柔らかい。要素としては色々あるかもしれないけれど、そのすべては要素でしかなく、舞と言う人物を評するのに相応しい言葉ではなかった。だから、僕は彼女がどんな女性かと訊かれたら、そのどれでもなく、唯『魂のひどく美しい人』とだけ答えると思う。

一度、舞に直接そう言ったら、キョトンと瞳を丸くして、「それってすごくキザなセリフね」と言われてしまった。

けれど、やっぱりお世辞や誇張を抜きにして、舞は『魂のひどく美しい人』なのだ。少なくとも僕はそう信じて疑わない。

「私は、あなたのことを愛していたのですか？」

「そうです」

「あなたも私のことを愛していた？」

「ええ」

座席の間の中央通り。くすんだ赤のタイルの敷き詰められた先に佇む彼女は愛らしい小さな顔を斜めに傾けて、僕の言葉を思案していた。

『僕と君は恋人でした』

そんなことを言わないといけない日が来るなんて、あの当時の僕は想像さえしなかったろう。唯、彼女が傍にいてくれれば幸せだったあの日。あれから、全てが夢だったのじゃないか、と思えるくらいの時間が流れてしまった。

「そうですか。でも、どうして私とあなたは姉弟なのに、恋人になつてしまったのでしょうか？」

「それが運命だからだと思います」

「運命？」

「そう。偶然が必然を呼び、必然が偶然を呼んでしまった。そして、僕らは何度でも同じ選択をしたでしょう。人はそれを何と呼ぶのか知らないけれど・・・僕は運命だと思います」

「そうですか」彼女はその澄んだ瞳をステンドグラスの光に輝かせて、「確かに、私には記憶がないけれど、色々あったような気がします。悲しいことも、嬉しいことも、辛いことも、幸せに思えることも・・・本当に色々とあなたと経験したような気がします」と言った。

蠟燭の光が揺れる。チラチラと輝く光は静かで、音のないクリスマス夜の夜を一層静かな場所にしていた。その中に佇む僕と舞。彼女は真っ白なコートを着て、僕が知っているままの微笑をこぼす。

「何か、話を聞かせてくれませんか？」

「話？」

「そう、私たちのことを」

彼女は祭壇の土台にゆっくり腰を下ろすと、僕に隣を促した。どこか懐かしさを感じながら、その場所へと近づいて行く。

「ずいぶんと長くなってしまっけれど、いいのかな？」

形のいい瞳が瞬き、

「クリスマスの夜は長いですから」と微笑する。

「そう」

じゃあ、何から話そうか・・・。

僕はしばらくぶりに彼女の隣に腰を下して、その小さな微笑に応えた。

「君が、どんな人かと訊かれたら、きっと僕はこう答えると思う・・・」

あの時のようにゆっくりと流れる穏やかな時間を感じながら、二人の話を君に聞かせよう。すべてを君が忘れてしまったとしても、僕は確りと憶えているから。決して楽しいばかりの日々ではなかったけれど、それでも二人の物語には変わらないのだから。

そう・・・、君は・・・

「魂のひどく美しい人だった」

*
*
*
:

:
*
*
*

? memories (2)

冬の夜。風のない、静かな夜。きっと世界に存在しているのは、僕と舞だけなんじゃないだろうか。って思えるほど、優しくて寂しい夜。金色に輝く月が澄んだ光を投げて、星がそつと僕らを見ていた。

「智也？ 寒くない？」

そう言つて、お互いの間にあつたほんの数センチの隙間を埋める舞。僕は微笑を浮かべて、彼女の肩を抱き寄せた。

「こうしていれば寒くないよ。たぶん、ここがもつと寒い国だったとしても、舞といれば暖かいと思う」

「私も。たぶん智也と一緒になら、どこだつて一番居心地が良くなるような気がするから」

流れるように曲線を描いた髪を右耳に掛けながら、彼女はそう言つて笑みを浮かべた。

どこにいてもお互いが傍にいれば、そこが一番心地の良い場所になる。そんなことを思える二人は、世界にそう多くはないのかもしれない。だから、今、僕らがその完成された関係であることを感謝しないといけないし、大切にしないといけない。

隣を見ると、月の明かりで金色になった睫毛を瞬かせながら、形の良い飴色の瞳が揺れていた。

「どうしたの？」

そう僕は擦れたような小さな声で訊く。

「智也はどこか行きたいところってある？」

「行きたいところ？」

毛布を胸に抱き寄せると微かな衣擦れの音がして、彼女の少しだけ湿った髪からシャンプーの甘い香りがした。

「寒い国、温かい国、海に囲まれた国、山の多い国、古い国、新しい国……。いろんな国が世界にはあるけれど、どこか行ってみたいところはある？」

指を一つ一つ折りながらそう舞は言った。

「舞と一緒になら、どこでも楽しい気がするけれど……。やっぱり海の綺麗な国がいいな」

「そっか。智也は海、好きだもんね」

「うん。舞は？」

楽しそうに瞳を瞬かせて、彼女は頭を僕の肩に載せた。

「私は自然の綺麗な国かな」

「アイスランドとか？」

「あんまり寒い処も困るけれど、空気が澄んでいて、空が青くて、

食べ物がおいしくて、住んでいる人が優しい国に行きたい」

「結構贅沢だね」

僕の感想に声を上げて喜ぶ舞。

「要望は多い方が楽しいじゃない」

嬉しそうな笑い声が狭い部屋に広がっていく。そして、僕もそんな舞につられて、なんだか楽しくなってしまう。

一つしかない窓の外。一見すると、壁に飾った一枚の絵画にも見える長方形に切り取られた外の世界。そこから、淡い雲をまといながらも、澄んだ光が優しくこの場所に差し込んでくる。目を凝らしてみると、月の周囲だけ空が色を変えているような気がする。ぼんやりと、何色かは分からないけれど……。

「世界には、私たちだけ……」

外の景色に見とれていると、ポツリと、舞がそう言った。

「なんだかこうしていると、世界の終りの日みたいに思えてこない？」

だって、と彼女は続けた。

「外は真っ暗で、物音もしないし、誰の声も聞こえない。あるのは智也と一緒にいるこの部屋だけ。だから他の全てがなくなっていたとしても私達は気付かないかもしれない」

「舞は不思議なことを考えるよね」

「そう?」

白い横顔が窓の外を見つめていた。僕は彼女の視線を追うようにして、目を凝らして見るけれども、一体彼女が何を見ているのかは分からなかった。だって、きっと彼女はそこにはないものを見ていたのだろうから。

「もし」と舞は言った。「もし、神様がいるのなら、こんな汚い世界は滅ぼしてしまいたいと思ってるはずだわ。そして、もっと優しくて他人の痛みを分かちあえられる人ばかりが生活する世界を作りたいと思っているの」

「そうかもしれないね」

僕は小さく同意する。

「死ぬことも、病気になることも、怪我をすることもない。そして、心を傷つけられない世界。そうすれば、誰も泣かなくていいし、温かく笑って暮らせるのかもしれない」

「そんな世界があつたら、舞は行きたいの?」

「分からないわ」

だって、そんな世界は知らないもの。

その時の舞の横顔はとっても綺麗だった。凜とした強さと哀しい弱さが同時に存在していて、どこかを見つめる視線は真剣で柔らか

った。たぶん、彼女が神様だったら、誰も傷つくことのない温かくて優しい世界を作るのだろう。でも、

「私には智也がいるから」舞は月の澄んだ光を浴びながら、「だから、ここが私のいるべき場所なの。他のどこでもないここが、私のいるべき場所」と言った。

「うん。そうだね」

たとえば、天国があつたとしても、楽園があつたとしても、二人のうちどちらかが欠けてしまうなら、そこは僕らのいるべき場所ではない。

舞が体の向きを変え、その拍子にヒンヤリとした冷たい空気が毛布の中に流れてくる。回された腕に彼女の温もりが感じられ、僕らはお互いがお互いを温めるように体を寄せ合った。舞が僕の腕を心細そうにギュツと抱き、その拍子に彼女の髪が、着ていたシャツ越しに、胸のあたりに流れ込んできた。

「月はずっと私たち人を見てきたのね」

「うん。そうだね」

「色々な国を、時代を、人を見てきて・・・こんなに汚れてしまった世界をどう思っているのかしら？」

いつも何も言わず、唯、夜が完全な闇に呑みこまれないように照らし続けてくれる月。時に人は泣きながら、笑いながら、怒りながら、真剣に、冗談交じりに月に向かって願いをし、相談をし、心の内を語ってきたのだらう。その度にこの静かな夜の母は、その静寂

ゆえに多くの言葉を受け止めてきたのだろうか。

そう考えると、何だか哀しくも優しい気持ちになる。

「きつと僕らみたいに、秘密の関係を続ける恋人達も、見てきたの
だろうね」と僕は言った。

舞は小さく頷くと、

「そうね」とだけ言って窓の外を見ている。

たぶん、舞は僕にとって月のような存在だと思う。夜のように、
暗い悲観的な世界にあって、心地の良い憤み深い月明かりのように
そつと包んでくれる。どんな時も彼女の傍にいれば、僕は落ち着い
ていられた。そして、これからどうすればいいのか、どこに行けば
いいのか気付かせてくれる。舞はそういう存在だ。

「たぶん、僕は舞に相応しくないのかもしれない」

そうポツリと言葉が零れた。とても自然に、違和感なく。

「そんなこと・・・」

眉を寄せて何かを言おうとした舞の薄い唇に人差し指を当てて、
「分かってる。それでも僕は舞から離れるつもりはないし、離す気
もないよ。ただ、やっぱり僕はまだまだ舞に相応しい人になれるよ
うに頑張らなくちゃいけないね。もっと、舞が頼れるような大人な
男にならなくちゃいけない」

だって、と僕は続ける。

「月だって、傍には星が輝いているだろ？　きっと月が多くの心を受け止めてきたのと同じように、星が月の心を受け止めてきたんだと思う。だから僕は、舞にとって星のようにいつも傍にいて支えられる人にならなくちゃいけないと思うんだ」

「今でも十分だと思うわ」

僕は彼女の瞳をまっすぐ見つめて、

「これからもずっと、舞からそう言ってもらえるために」と笑った。

小さくクシュツと微笑してそれに応えてくれる舞。

今の僕にはその笑顔があれば何だってできる気がした。将来なんて不確かだと言うけれど、僕にとってずっと舞と一緒にいることは変わることのない未来で、その未来を得るために払う努力が何であつても、少しも惜しむことはないのだ。この先ずっと、舞が僕を愛してくれるのなら。

そう、死が二人を分かつまで・・・。

カタカタと夜を切り取った窓が揺らされ、屋根越しに勢いよく風が通ったのが分かった。僕は胸を流れる艶やかな栗色の髪を指先ですくって、

「今度、旅行に行ってみない？」と訊いた。

「旅行？」と舞が首を回して僕を見る。

「日帰りでもいいからさ。誰にも遠慮する必要のない処に、舞の好きな自然を楽しみに二人で行かない？」

長い睫毛が何回か瞬いて、飴色の瞳が嬉しそうに揺れる。

「智也と一緒に旅行かぁ。・・・いつにする？」

「今度の週末にでも早速。場所は僕がいくつか候補を挙げておくから・・・」

「それはとっても楽しみね」

そう言って微笑する。

カタカタと窓ガラスが冷たい風に揺れ、どこからか葉のざわつく音が微かに聞こえてくる。狭い部屋には僕と舞。きつと世界は滅びてしまつて僕ら二人だけしかいないのかもしれない。そう思つてしまふほど静かな世界で僕は彼女に応えて微笑する。

絵画のように切り取られた夜の景色が、薄い光で僕らを見守っていることを感じながら。

? memories (3)

何でもないことが気になって眠ることのできない夜。妙に冴えてしまった瞳をなごり惜しくこすりながら、そっとベッドを抜け出した。初めはトイレにでも行って、また眠る努力をしようかと考えていたのだけれど、静まり返ったりビングに足を踏み入れたとたん、なんだか寝るのがもったいなく思えてしまった。

色のない、モノクロームの世界。

ひっそりと息を潜めているかのように、自分の発する衣擦れの音と微かな呼気の音が響いていた。

そして、そっと差し込んでくる月の光。

いつもと違う、見慣れているはずの自分の家が、じっと僕を見つめている。そう感じた瞬間に、心臓がギュツと締め付けられるような心地のよい痛みを発し、それに促されるように僕は急いで部屋に戻っていた。

白いシーツの中で、寝息を立てる舞。

彼女を視界の端に捉えながら、できるだけ音を立てないようにジーンパンに足を通し、ジャケットを羽織る。

ドアを閉めるときは出来るだけそっと、そっと・・・。

こうして、夜の街に足を踏み入れた僕は冷たい外気に上気した頬を晒して、ふと、視線を上にあげてあることに気付いた。

「意外と明るいんだ」

とたんに白い吐息がクルリと月光の中を踊り、後形もなく消えてしまった。街灯の少ない家の近所は真っ暗だと思いきや、意外なほど明るくて、それに今まで気付かなかったことが本当に不思議なほど、辺りは優しい光で照らされていたのだ。なんだかそれに気付いたことが嬉しく思えて、幾分軽い足取りでスニーカーを進め始める。

時折、蛍光灯の明かりに照らされた自販機や、西洋の趣向を凝らした街灯があっただけれども、ほとんど、光という光は月と星だけだった。

なんて、特別な夜なんだろう。

そう感じずにはいられない。

途中、あったかい飲み物で体を温めようと、自販機のボタンを押したら、あまりに大きな音を立てて缶が落ちてきたから、僕はその不躰な音にこの夜の街が目を覚ましてしまっんじゃないかって気にさえなった。

そんな、本当に静かで優しい夜。こういう時間が自分のすぐそばにあることを知らなかったことが、なんだか損をしていたような気さえしてしまう。

大きくて丸い月を眺めながら、目的もなく、なんとなく気の向くままに足を進め続けた。それは、見慣れた街が別のものに変わったような感覚。絵本の中の一ページのように、不思議で、ちよつとだけ物悲しく、でもわくわくしてしまうようなおとぎの国だった。

そうやってどこに行くでもなく進めていた足は、いつの間にか海岸に向かつていて、気付くと潮の香りが辺りに満ちていた。時刻は真夜中。朝の太陽が顔を見せるにはまだ早すぎる時間だ。

防波堤の隙間に作られた階段に腰をおろして、唯、潮の香りと波の音が聞こえるだけの真つ黒な海を見つめることにした。水平線に大きな月が、どこまでも続く光の道を一筋、闇に沈んだ海につくりだしている。風はほとんどなく、人もなく、物もなく……。目の前にあるのは穏やかに風ぐ海水の満ち引きの気配。

そうしていると、ちょうど……。あの日もこんな海を舞と一緒に眺めていたと、ふと目の前の景色が記憶の深い処を探り出した。もう、ずいぶんと昔のことのような気もするし、つい昨日のような気もする。あれは僕と舞が『恋人』という関係になった日のことだ。

過去の記憶は『二年前』。

始まりは僕が高校二年、舞が三年の記憶。

あの頃、皐月智也と舞は血の繋がっていないことと、その為に普通の姉弟よりも幾分仲の良いことを除けば、いたって一般的な『家族』という言葉で表現される関係だった。それが変わってしまったのは、果たして僕らにとって良かったのか、悪かったのか、正直、素直にそれを喜んでいいのか、きっかけになったことを思うと今でも迷っている。

当時、バスケット部に入っていた僕は、冬の大きな大会を間近に控えていた為に、毎日遅くまで練習していた。まあ、三年の引退試合と

言うことなので、彼らのピリピリしたムードを受けて僕ら二年生も付き合わされていたと言ったところだろう。とにかく、僕は家に帰るのがこの時期は遅かった、ということだ。

もう、すっかり暗くなった道をジャケットに両手を突っ込んだ格好のまま、マフラーに顔半分を埋めて足早に家へと急いでいた。今でも憶えているのは、煉瓦で造られた歩道を照らす街灯の一つがチカチカと消えかかっている、その下にチェック柄の赤いハンカチが落ちていたことだ。誰かに踏まれたのかもしれないそのハンカチは汚れていて、もう二度と持主の手元に戻ることがないとすれば、それはそれで可哀想なものだと、練習で疲れていた僕は何気なく思ったのだった。

家へ帰ると、いつものように晩御飯の匂いが玄関まで香っていて、練習でお腹を空かせていた僕はすぐにリビングに向かった。

蛍光灯の明かりと、鍋から洩れる白い蒸気。

テーブルには何も入っていない食器が料理を待っていて、僕は空腹を感じながら姉さんを探した。

「姉さん？」

返事がないことを訝しがりながら、カウンターキッチンの中に入った僕は、そこに舞の姿を見つけて驚いた。

「姉さ……ん」

床にあおむけに倒れている舞の苦しそうに閉じられた瞳。病的なまでに青白くなった頬と、苦痛のためにかいた汗で前髪がべったり

と張り付いた額。僕が慌てて抱き起こすと、彼女の色の薄くなった唇からは微かな呻き声が洩れた。

「姉さん、しっかりしろよ！」

いつもの夕方。いつものリビング。いつもの食事。それらは本当にいつも通りの姿でこの場所にあったのに、舞だけがいつもと違っていた。

「姉さん！」

体の奥深くを冷めた汗が伝っていく不快な感触。それはまだ何が起こったかしっかりと理解できていないのに、本能的に絶望を感じ取った瞬間だった。

姉さんが壊れてしまった。

そう僕はとつさに思った。

脳裏に浮かんだのは、道路に打ち捨てられたハンカチ。どうしてか、姉さんとそれが重なって、僕は自分でもよく分からない焦りを感じた。きっと、舞が二度と持ち主のもとに戻らないハンカチのように、僕の傍から消えてしまうんじゃないか、そう思ったから。ちようど、心の半分が枯れてしまったような、気持ちの悪いアンバランスな状態の中、真っ白になっていく頭の隅で、妙にはやる鼓動が煩かった。

それからどうしたのかは正直憶えていない。なんだか靄がかかったようにボンヤリとしていて、曖昧で断片的な記憶があるだけだった。

た。気がつけば、慌てて会社から駆けつけてきた両親と一緒に、大きな縁の眼鏡をかけた医者から説明を受けていた。

彼は何の感情も読み取れない瞳で姉さんの病状を簡単に説明し終えると、「とりあえず、今のところすぐに命がどうこうという問題ではないのですが」と言葉を切った。

消毒液の匂いで息が詰まりそうだった。

彼の説明によれば、舞は心臓に先天性の欠陥があるそうだ。あまり詳しい内容は分からなかったけれど、心臓内にある心室同士が繋がってしまっている。だから、静脈と動脈が混ざってしまって、正常な血液を全身に送ることができない。そんなところだったと思う。

隣で両手を胸の前で組んでいた父が、何度も大きく喉を鳴らしたのが分かった。

「ですが、もともとお嬢さんは体力のある方ではないようですね。それに心臓自体の力がそれほど強くない。手術をして、右と左の心室を正常に分けることはできますが、負荷がかなりかかるので、術後の生活はかなり限られたものになるでしょう」

医者は無機質な瞳で僕をとらえ、「それに」と言った。「頻度は定かではありませんが、今回だけでなく、何度か手術を繰り返す必要もあります」

彼がレントゲンをライトに掲げ、白衣のポケットに刺していたペンで説明を続ける。僕にはその話のほとんどが耳に入ってこなかった。ここにいない姉さんのためにも、代わりにしっかり聞いておかなければならぬことは分かっていた。けれど、頭が真っ白になっ

て、何も考えられなくて、唯、大変なことになってしまったという焦りだけがグルグルと螺旋を描いていた。

「一緒に頑張っていきましょう」

涙ぐんでいる母さんに医者が淡々とした口調でそう言った。

彼にとっては仕事の一部で、日常で、慣れてしまったことなのかもしれない。姉さんよりも、もっと重篤な患者をたくさん診て、たくさん死を知っているのかもしれない。だから、彼は何事もなかったように平然と話ができるのだらう。けれど、僕には黒い大きな縁の奥にある無機質な瞳がどうしても好きになれなかった。姉さんがこんなことになっているというのに、この医者は何とも思わないのだらうか。そんな身勝手な考えと、姉さんが倒れるまで気付くことのできなかった自分自身への苛立ちが、消毒液の匂いの充満する狭い部屋の中で募っていく。

二年前の冬の始まり。

優しくて、綺麗で、憧れだった姉さんが初めて倒れた。

しっかりと握りしめた右の拳。僕はライトで照らされた舞の心臓を睨みながら、雪のようにゆっくりと、でも確かに積もっていく苛立ちをどうすることもできなかった。

? m e m o r i e s (3) (後書き)

感想等いただけますと、非常に励みになります。

ランキング参加中です。 バーナーのクリック、お願いします。

? m e m o r i e s (4)

そこは灰色の場所だった。彩色的には白なのだろうが、たぶん訪れるほとんどの人にとってはそうでないと思う。特に患者の家族とか恋人とか友人とか、関係が近ければ近いほど、親しければ親しいほど、この場所は憂鬱で印象はくすんでしまうのだ。だから、ベッドから身を起して窓の外を眺める姉さんを見たとき、僕は彼女がこの灰色の空間に押しつぶされてしまっんじゃないかって不安になった。

「気分はどう？」

ここは個室だったけれど、何かに遠慮するように小さな声でそう言った。もしかしたら、病院という環境がそうさせるのかもしれない。

「そうね。悪くはないわ。痛みも我慢できないほどではないし。とりあえず大丈夫」

そう言って微笑んで見せる姉さんは少し痩せてしまったように思える。もともと細い方だった彼女は、ここ数カ月で一回りほど小さくなったし、透き通った白い肌には静脈が浮かんで、なんだか存在自体が儚かった。

「そう言えば、もうすぐ智也くんは三年生になるのね」と姉さんは言った。「私はこの調子だと進学できそうにないけれど、智也くんはちゃんと進学するのでしょうか？ この一年間は勉強で忙しくなるわね」

「そうかもね。まだ部活もあるし、勉強とか、進学とかはそれから考えるけれど」

「そっか。バスケットも頑張らないといけなかったね」

そう言っで、姉さんはまた優しく笑う。いつもの、僕の知っている温かくて柔らかい瞳で笑うのだ。

昔から彼女はそうだった。自分がどんなに忙しい時でも、大変な時でも、他人の心配ばかりして。体力だってそんなにある方じゃないのに無理ばかりする。そんなんだから、彼女の小さくて弱い心臓は壊れてしまったのかもしれない。

二回目の手術。

先天性の疾患と言っても、もともとそれほど大きな欠陥ではなかったのに、それは歳を追うごとに肥大していき、ついに彼女の体は悲鳴を上げた。倒れてからすぐに手術を行い、それから数カ月後の一昨日、二回目の手術が終わったばかり。二度もこの小さくて細い体にメスが入ったのかと思うと、僕はぞっとする。

窓の外では終わりがけの冬が僕らを見ていた。薄く伸びた白く濁った雲が傾きかけた空を背景に、冷たい風に流されている。

「やっぱり、また手術をしないといけないのかな？」

細い指をシーツの上で組んだ姉さんは、消え入りそうな声でポツリと、そう訊いた。僕は喉が急に干上がってしまったて、何度か口を開きかけて、でも言葉を発することはできなかった。

だって、何と言えればいい？

二回も辛い思いを経験して、またこれからも永延とそれを続けなければいけない。そんなことを目の前の、今にも壊れそうな女に言えるだろうか？

そう困り果てている僕を見て、「ありがとうね」と姉さんは言った。

「どうして？」

「だって、智也くん一所懸命私のことを考えてくれているでしょう？」

「・・・」

その大きな飴色の瞳で僕をとらえた彼女は、
「優しいね、智也くんは」と微笑した。

彼女だって分かっているのだ。自分の体のことだ、周りがいくら元気づけたって気付いてしまうのだろう。それでも訊かずにはいられない。そんな心境は僕にでも何となく分かる。

十年・・・なるべく心臓に負荷を掛けないように極力注意をしながら生活して、手術を何度か成功させて・・・。

姉さんの担当になったあの眼鏡の医者には、彼女のいない時に僕に声を掛けるとそう言った。

「僕もできる限り努力はするけれど、こればかりは本人次第と言ったところだろうね。ベストの状態が維持できたとして、十年が彼女

の心臓にとって限界だと思う」

「十年……」

それはあまりに突然で短過ぎる宣告だった。

残りの人生が後『十年』。しかも、それは運が良ければと言うことらしい。彼は大きな眼鏡の縁を指先で整えると、

「君が彼女を支えてあげないといけないよ」と言っただけを返した。

消毒液の匂いのしみついた白衣を見送りながら、僕は病院の薄暗い廊下の端で動くことができなかった。

姉さんが何をした？

そう思った。

何かをしたからこんな状態になったのか？ どうして姉さんなのか？ いつだって優しくて温かで穏やかで、そんな彼女がどんな理由があると言うので、こんなに苦しい思いをしないといけないのだろうか？ ただ、皆と同じように進学して、就職して。そのうち、あの家を出ていくのかもしれない。きっと姉さんが誰かと付き合うようになれば、僕は相手がどんな奴なのか見定めてやろうとか思っただけで、でもきつと彼女なら素敵な男を連れてくるに決まっただけで。そして、お互いに結婚して、それぞれの家庭を持って、歳をとって。そう言う当り前の生活を彼女は慎ましく望んでいただけじゃないのか。

病はあまりにも理不尽だ。

だって姉さんから全てを奪ってしまったのだから。『未来』という名の当り前の時間を消し去ってしまったのだから。

「智也くん？ どうしたの？ 怖い顔をして・・・」

僕の顔を覗き込むようにして、斜めに小首を傾げる姉さん。

「眉毛がこんなによつて。すつごく怖い顔」

大袈裟に大きな瞳をさらに大きくして、彼女は僕にそう言った。

「ああ、今度の練習試合のことを考えていたら自然とね」

「そうなの？ やつぱり相手は強いの？」

「まあね」

両肩を上げて僕はおどけて見せる。

「僕がいるから絶対に負けはしないけどね」

「すごい自信・・・」

自分の長い髪を指先に絡ませながら、姉さんが笑う。本当は部活のことなんか少しも考えてる余裕はなかったけれど、
「当然」と僕は笑った。

灰色のカーテン、灰色のシート、灰色の壁。くすんだ重たい部屋の中で僕らは小さく声を上げて笑う。そうやって彼女が少しでも心から笑えているなら、僕は道化にも躊躇いなくなるだろう。例えばそ

れがほんの少しの時間に過ぎなくても、全くないよりはましだろうから。だから、僕らはくだらない話をいくらでもした。最近のテレビで見たドキュメンタリー。面白かった小説、美味しかった料理、新しくできたお店、学校での噂話。話題は何でも良かったし、だから尽きることはなかった。どうでも良いようなことでも姉さんは時に真剣に、楽しそうに、懐かしそうに聴いてくれたから、僕は遠慮なく話をした。要は、話自体がというより、一緒に話をしているということが大事だったから。

言葉の隙間に落とされる相槌。何気ない微笑。

少しでも彼女が僕を求めるのなら、家族として、弟として、それに応えてあげたかった。もしかしたら、実際に血が繋がっていないからこそ、その絆を一層意識するのかもしれない。

「いつもありがとうね」

ふと、会話が途切れた時に、彼女がそう言った。

「智也くんが来てくれるおかげで、私はその間病氣のことを考えないでいられるの。そうは言っても痛みがなくなるわけじゃないのだけれど、それでも一人でいる時よりも、ずっと・・・」

姉さんの肩越しに夕日が差し込んできて、灰色の病室がこの時だけは真っ赤に燃えあがる。ほんの少しの間だけ色のない世界から解放される瞬間だった。

「いいんだ。僕は姉さんの弟だから」

夕陽の輝きに瞳を細めて、ちょうど影になった彼女に向かって言

った。

「たぶん、『もう来なくていい』って言われても、僕は姉さんが気になって仕方ないと思う。それなら、こうやって顔を見て安心していた方が、よっぽどお互いのためだと思うよ」

「そうかしら？」

「きつと、そうだよ」と僕は頷く。

それに合わせて微笑する舞。表情のほとんどは逆光のせいで分かんなかったけれど、彼女がいつもの優しい瞳で僕を見ていることを意識する。

「なら、明日も明後日も、ずっとずっと、智也くんが来れるときはお見舞いに来てください」

「うん、了解」

できるだけ気軽に、彼女に気にさせないように僕は明るく返事を返す。こんなときだって誰かに頼るのを遠慮してしまうのは、姉さんの悪い癖だと思うから。

「なら、僕はそろそろ帰るよ。面会時間も終わるし」

「そうね」

ベッドから出ようとする姉さんを押しとどめて、僕は素早く荷物を手にすると廊下に出る。

「また明日来るから」と僕は言った。

「無理はしないで」

「うん」

この狭い病室に姉さんを一人残すのは、何度経験しても慣れなかった。でも、灰色の病室が色彩を帯びているこの夕暮れ時なら、少しはましかもしれない。それは単に僕の自己満足かもしれないけれど、やっぱり色のない病室で見送る彼女を見ると、今にも消えてしまふんじゃないかって不安になるから。

真っ赤な部屋。金色に輝く髪。影になつて見えないけれど、きっと僕を見る瞳は優しくて……。

閉まつていく病室の重たい扉。だんだんと遮られていく視界に、ちょっとだけ寂しさを僕は感じて、小さく手を上げると左右に揺らして見せた。その時、扉の閉まるほんの一瞬のことだったけれど、ベッドから体だけ起こした姉さんが素早く唇を動かしたのが僕には分かった。

その言葉はきつと僕の勘違い。

間違つても彼女がそんなことを言うわけがない。

でも、僕には姉さんの薄い唇が夕陽の中でこう呟いたように見えたのだ。

『A・I・S H I・T E・R U』と。

パタンと音を立てて閉まつた扉の前で、僕の心臓は大きく跳ね上

が
っ
た。

? memories (5)

視界全てに入ってくる空に遠近感はなく、すぐそこにあるような気もするし、でも、とてつもなく遠くにあるような気もした。目の前を薄い霧の雲がゆつくりと流れ、まるで時間の流れが穏やかになってしまったようで、のんびりとした怠惰な感覚に僕はあくびを噛み殺す。

風一つない静かな昼下がり。枕代わりになっている厚めの文庫本とコンクリートに思いっきり投げ出した手足。大学の屋上にやってきた僕は何をするでもなく、唯こうして、一人でぼんやりと空を眺めていた。

ゆつくりと右手を空に翳して見る。

そこには届きそうで届かない、有るのか無いのかさえ分からない、魅力的なのに当り前な青が流れているから不思議だ。本当に空はあるのだろうか？ ふと、そんなことを考えてしまう。

「流石に徹夜はきついな・・・」

今感じている時間のように間延びした口調でそう言うと、ぼくは再度込み上げてきた欠伸を思う存分して、浮かんできた涙に瞬きを繰り返した。頭の中は靄がかかったように思考が朦朧としていて、なんだか一気に歳を取ってしまったように全てが億劫で仕方ない。

昨日の夜。いや、正確には今朝か。

こっそり家を抜け出した僕は海に出て、眠れない一晚を明かした

のだ。なんとなく静かな海を眺めていたら、舞との思い出が込み上げてきて感傷にすっかり浸ってしまった。気がついたらあたりが白み始めて、気だるい体と妙に冴えてしまった頭が家に戻っても眠らせてはくれないまま……。

「やつぱり、今日はサボった方が良かったかもしれないなあ」

そもそも、こんな寝不足の状態で学校に来たって、折角の講義が欠片も頭になんて入って気やしないのだ。もともとそんなに真剣に日頃から講義を取っているわけではないけれど、それでもこんな状態ならなおさらだと思う。

でも、本当はそんなこと……僕にはできない。だって、舞はこうして大学に来れないから。

実のところ、彼女はほとんど外に出ることもない。唯、あの家の中で静かに大人しく生活しているのだ。ひたすら自分の壊れかけの心臓にこれ以上負担をかけないように生活している。だから、たまに体調がいい時、僕は出来るだけ舞を外の世界に連れ出すようにしている。

そこにあるのは当り前の日常。ありふれた景色。

けれど、舞にとってはいつだって懐かしさと憧れと苛立ちの詰まった特別な世界。

だから、僕は彼女の経験することのできない特別を、彼女の代わりにできるだけ経験しなければいけなかった。それを舞が望んでいたから。

『二人で一つなのよ』

舞はそう言つて、自分の傍から離れようとしないう僕を日常へと押し出した。たぶんそうしてくれなかったら、一秒でも限りのある二人の時間を過ごしたいと望んで、僕は外に出ようとしなかっただろう。だから、舞は言つたのだ。

「私は智也をダメにするために好きになつたんじゃないの。唯、寄り掛かっているのが心地いから好きになつたんじゃないのよ」

いつになく真剣な瞳をした舞は、僕よりもずっと大人びた口調で、「だから、智也は普通の生活をして。私にとって、特別になつてしまった生活を……。だって、私たちは二人で一つになつたのだから。私のできないことは、智也がしてくれないと」と言つて笑つた。

だからこそ、僕は彼女のいけなかった大学という日常を、放棄するわけにはいかなかったのだ。

「それにしても……。眠たい」

溜息に似た言葉が漏れて、どこまでも穏やかな空が眩しい。

もしここが固いコンクリートじゃなくてベッドの上なら、今この瞬間にも眠れるのに……。そう思いながら、もう一度手足を思いっきり伸ばして、僕は大きな空を独り占めした。

考えてみれば彼女の日常が失われなかったなら、僕らは姉弟という関係のままだったのかもしれない。こうして眠たい目を擦りながら講義に出ることもなかったし、彼女だって自分の好きな時に好きな処に出かけて、思うままに生活できたはずだ。

失われた普通の生活。そして、生まれた僕らの恋。

僕は誰かを愛することがこんなに悲しくて、素晴らしくて、残酷で、幸福なことだったなんて知らなかった。もつと淡くて切ない、映画とかドラマとか小説とかみたいなものが恋愛なんだとずっと思っていたのに、現実はとってもひどいものだった。

舞を本当に愛しているのに、でも、それが彼女の不幸の上に成り立っていることを意識しなければならないなんて。本当にひどいことだ。

だから、僕は奇跡も神も信じることはない。そいつらは何もしてくれないから。

ほとんど睡眠へと落ちかけている思考の中で、微かに開いた瞼の隙間から空の青を眺める。

昼下がりの屋上。風一つない静かで温かい冬の日。

思い出すのは舞からの秘密のメッセージ。僕だけに向けられた、彼女を一人の女性として意識させた決定的な言葉。

『A・I・S H I・T E・R U』

あの時に感じた死んでしまうくらいの胸の高鳴りは、今にも先にもあの瞬間だけだった。あの時、音のない夕陽に彩られた病室で、舞の唇が僕に向かって五つの形を作った。それは魔法のように一瞬で僕の心を虜にしまった。たぶん、その前から彼女に恋をし始めていたのだと思うけれど、きつと本当にその気持ちを意識したの

はあの時が最初だった。

しっかりと閉じられた病室の扉の前に突っ立って、僕は暫く動くこともできなかったのを覚えている。後でよく考えれば『アイシテル』ではなく『アリガトウ』だ。だって、お見舞いに来た人間を見送る言葉は普通そうだから。

けれど、一瞬の隙について掛けられた魔法に動揺して、僕はぜんまいの切れた人形のように茫然と突っ立っていたかと思うと、看護師の注意を耳にしながらも、突然あらん限りの速さで病院を駆け出したのだ。

それは幸せで残酷な勘違い。

舞に恋する僕の心をほんの少し押してくれた、おかしい瞬間だった。

もう、すっかり日が暮れてしまっていたから、肺が破裂しそうなくらい悲鳴を上げて肩を鳴らしながら立ち止まったそこは明りが点いていた。

規則正しい間隔で並んだ街灯。

その切れ目にそれは在った。

小さな、でも綺麗に整えられているそれは、街の一番見晴らしいのいい高台にある教会。微かに瞬き始めた星が、煙突のように空に突き出した鐘楼の傍に、二つほどあったのを覚えている。

何と言うか、この時の僕は色々と一杯いっぱいだったのだと思う。

混乱していたと、言うべきだろうか？　いつもは目もくれない人の気配のないその場所に吸い込まれるようにして、重たくなった足を伸ばしたのだ。

コッソン・・・。

金具の軋む音をさせて木製の扉を開けると、思っていたよりもずつと広い部屋に足音が反響した。きつと吹き抜けの天井がそうさせるのかもしれない。蠟燭の明かりで照らされる長椅子。今は祭壇の横で沈黙を守っている大きなパイプオルガン。そして、僕の視線を釘付けにしたのは、七色のステンドグラスで造られた神秘的な場面だった。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が背中から差し込んでくる月明かりを透過して僕の視界を彩っていた。そこに描かれているのは三人。女と赤子と翼を持つ男。僕はクリスチャンじゃないから、その絵がどんな意味を持っているのか分らなかつたけれど、唯、その美しくて神秘的な場面に息を呑んだ。

たぶん荘厳って言葉はこういう物のことを指すのだろう。

ひんやりと夜の湿気を含んだ空気を感じながら、音をなるべく立てないようにそつとスニーカーを進めて、祭壇の前の席に腰を下ろした。ジーンズ越しに伝わってくる冷たい椅子の感触を意識しながら、僕はさっきまでの動揺が嘘みたいに静かな気持ちでそのステンドグラスを見る。

まだ幼い赤子の無垢なガラスの瞳。

何秒か、何分か、何時間か、時の感覚がなくなってしまうような

気がするほど、唯、静かに僕は見つめる。

そして、風がひととき大きな音を立てて建物の外を通り過ぎるのを聞きながら、

「たぶん・・・」と言った。

「神なんて一生信じることなんてないと思う。この世に奇跡なんてないし、有ったとしてもそれは偶然と必然が重なって起きることだっと思う」

誰に話しているわけでもない、唯、独り言を漏らすように僕は言葉をつないだ。

「でも、姉さんに・・・舞に与えられた運命が、こんなにも理不尽なものなら、僕は彼女がその運命に押しつぶされないように奇跡を願ってしまう」

だって、と僕は続けた。

「こんなにも僕は無力だから。だから、もし、神って存在がいるのなら、助けてくれませんか？」

応える者のいない問い掛けが、高い天井に反響して何度も僕に訊ね直す。一時の静寂を感じ、何の答えのないことを確かめて、
「けれど、もし・・・いないなら。僕が彼女を守って、支えていく。僕は弟に過ぎないけれど、舞が好きだから。そして、彼女も僕を好きでいてくれるから」と言った。

それは甘くて切ない勘違いだったけれど、魔法にかかっていたから、何の躊躇いもなかった。

睨みつけるように七色に輝く三人を見る。たぶん、こんなに真剣に何かを言ったことは、今までなかったと思う。誰も答える者がないことは分かっていたし、答えを期待してもいなかったけれど、そう宣言することですっかり混乱していた自分の気持ちを理解することができたのだと思う。

僕は姉さんに恋してる。

ただ、それだけのこと。でも、これほど重要なことはないと思う。

この先、彼女はきつと今よりも辛い状態になっていくだろう。もっと儚く、もっと苦しく、もっと孤独に。そんな中で、僕なんかにできることがどれだけあるのか、そもそも出来ることが一つでもあるのかさえ分らない。でも、彼女が本当にその苦痛に耐えられなくなってしまう時、一番近くにいて少しでも支えることができればいいと思う。

それも、弟としてではなくて、恋人として。

たとえば、世界中の人が敵になるとしてもかまわない。姉弟だからという理由で、この気持ちをどうして隠す必要があるだろうか？
だってこの世界に神はいないのだから。何を恐れる必要があるだろう？

それに・・・、

「僕はあなたを敵に回してもいい。姉さんの為なら」

そう、舞の為なら、それさえ恐くはない。

七色のステンドグラスが、静かに僕を見つめていた。

? m e m o r i e s (6)

世界は笑っていた。

世界は泣いていた。

世界は怒っていた。

世界は・・・。

両手をそつと広げて深呼吸をする。鼻腔を通して肺に流れてくる空気は潮の香り。耳を攪る波の音と、チラチラと輝く空の星。目を凝らして見なければ、どこからか空で、どこからか海なのか分からないほど、二つは闇を纏い、星を抱きかかえていた。

「智也くんは悲しいって思ったこと、ある？」

隣で、僕と同じように海を見ていた姉さんがそう言った。

「うん。たぶんあるよ」

「そう」

彼女がどうしてそんなことを訊いたのか分らなかったけれど、その声は迷子になった子供みたいに心細そうだったから、僕は姉さんがどこか遠くへ行ってしまうないように、砂の上に置かれた手をそつと重ねる。

「私はね。悲しいって思ったこと、今までなかったのかもしれない。だって・・・」

強い風が吹いて、銀色の睫毛を瞬かせた彼女は、
「本当に悲しい時って、心がこんなに痛くなるんだって初めて知ったから」と言っただ。

春の終わり。連れだって夜の海にやってきた僕らは、星たちに話を聞かれないように、掠れ声で言葉を交わした。広い銀色の浜辺には二人しかいないと言うのに、秘密の言葉を交換する。

彼女が倒れてから、ちょうど四度目の手術を終えた夜。もう、あの魔法の言葉をもらって、何ヶ月も経ってしまった夜。彼女はこっそりと僕を病院の外に呼び出すと、何も言わないまま海へやってきた。僕も同じように何も訊かずに彼女の後を付いてきた。無言で腰を下ろした姉さんは、ポンポンと隣を叩いて僕を促すと、黙ったまま海を見続けた。そして、

悲しいって思ったこと、ある？ そう、ポツリと言葉を落とした。

「心ってね。痛くても血が流れたり、痣ができたりしないでしょ？ だから、誰もこの傷には気づいてくれないの。でも、私の心はもう、ボロボロになっちゃったかも」

そう言って微笑して見せる彼女は、今にも壊れてしまいそうで、なのに美しかった。

「何度も、何度も痛い思いをして。何度も、何度も怖くて寝れなくて。苦い薬も飲んだし、お医者さんの言うことを聞いて出来るだけのことはしたのに・・・」

私はどんどん弱くなっていく。

掠れる声に重なる波の音。

僕は何て言ったらいいのか分らないまま、唯、彼女の瞳を見つめる。触れた彼女の手の甲は思っていたほど柔らかくなくて、骨の感触ばかりだった。正直、姉さんはびっくりするくらい痩せてしまった。もともと細い彼女は一回り、また一回り、と手術をしていくにつれて小さくなっていき、今では腕なんか、僕が力を入れて握ったら折れてしまうんじゃないかってくらい細かった。

もう体力も、気力も、姉さんには残っていないのかもしれない。

自分の愛する人が日に日に弱っていく。それは、僕自身が何もできないだけに、苦しくて、悲しい時間だった。姉さんが言うように、心が痛むほど。血は流れないし、痣もできないから誰にも気づかれないけれど、本当に痛い。

「もう、終わりにしたいよ」と姉さんが言った。

「私、結構頑張ったと思うんだ。もう、いいんじゃないかな？ 智也くん」

星の瞬きを閉じ込めた瞳が僕を覗き込み、訊く。

この苦しい日々から解放されてもいいんじゃないかと。

「痛いのは嫌だしね。それに、私の体、傷だらけなんだよ」

そう言っただけは自分の胸の辺りに手を置いた。

「四回分。結構大きいのが四本。すごく嫌だよ」

空いている方の手に砂が食い込む。僕はいたたまれなくて、彼女の瞳から目を逸らした。

「私、どうしたらいいのかな・・・もう、お嫁にもいけないだろうし。そんなことよりも、将来すらない。残った時間はそれほど多くはないだろうし」

「そんなことは」

慌てて否定しようとした僕に、突然、彼女は鋭い視線を向けた。

「もう、嘘はたくさんなの！ 智也くんまでそう言うことを言うの？ もう少し頑張ったら良くなるから、もう少し我慢すれば楽になるからって」

みんな嘘ばかり。

彼女の栗色の髪が宙に広がり、掴まれた袖が引っ張られて歪んだ。

「嘘を言うのはやめて！ 智也くんまで私を騙さないで！」

「僕は・・・」

何て言えばいい。彼女の命が残り少ないのを知って、何もできず

にいる僕は……。何て言えばいい？

励ませばいいのか？ 怒ればいいのか？ 懇願すればいいのか？
どれも今の彼女にとっては無意味なことに過ぎないのに。

「もう、分かってるの。私が壊れていることぐらい」

噛みしめた奥歯が音を立て、突き立てた指が砂を掻いた。

「嫌なの、痛いのは、苦しいのは」

彼女はそう言って銀色の涙を零した。

たぶん、初めてだと思う。姉さんが泣いたのを見たのは。ずっと我慢してきて、気丈に振る舞って、今、彼女の心は折れたのだと思った。僕を見据える瞳は見たこともないほど鋭いものだったのに、彼女の大きな飴色の輝きからは水滴が零れ落ちて行った。

だから、僕は細い肩を乱暴に抱き寄せる。

「ごめんね」と彼女にだけ聞こえる声で囁く。

「何で？ どうして？」

僕の胸の中で嫌々をする姉さんは訊く。

「私が何をしたらこんなに辛い思いをしないとイケないの？ 何でこんなに痛い目にあわないといけないの？」と。

でも、僕はその答えを持っていなかったから、唯、彼女を抱きし

めているしかなかった。

叫びは嗚咽を交え、ジャケットを通して感じる悲鳴が痛かった。

「私が何をしたの？　いつまでこんな思いをしないといけないの？」

銀色の夜。波が優しく押し寄せ、星をちりばめた海がキラキラと輝く。吹いてくる潮風は時に強く、時に穏やかに頬を撫で、そして僕らを追い越して行った。

どうしてだろう？　どうして姉さんなんだろう？

そんな問いは僕自身が何度となくしてきた。

どうして、僕の一番大事な人が苦しまなくてはいけないのか？
病院と言う鳥籠の中に囚われたまま、短い命を削りゆく姉さんを見て、その理不尽な現実を目眩がする。
それでも、答えは誰も与えてくれない。

「私は・・・」と彼女が言った。

「このままどうなってしまうんだろう。皆がそれぞれの人生を歩いて行くのに、私はあの病室で立ち止まったまま」

それは、悲痛な叫びだった。

だから、僕は金色の輝きを放つ月を見上げて願った。姉さんが少しでも楽になるように、その不安から解放されるように、涙を、痛々しい叫びを受け止めて欲しいと。優しい金色の輝きで守って欲しいと。

小さな彼女の肩を抱きながら、僕に出来ることはそれだけだったから。

「もし」と震える声があった。「もし、神様がいるなら、どうして私を助けてくれないの？　こんなに苦しいのに、こんなに辛いのに。私はもう、どうしていいか、分からないよ」

「神様なんて、いないよ」

彼女の湿った瞳が僕を見上げ、大きな雫がまた一つ頬を流れて行った。

僕は優しくそれを指先で掬って、それにと続ける。

「いたとしても、僕ら人間を助けてくれ程、暇じゃないよ」

「そうかもね・・・」

クシユンと、鼻を鳴らした姉さん。僕は長い栗色の髪をできるだけ優しく撫でる。奇跡なんて、そんなものはあるわけがないのだ。いくら願ったってそんなものは起きなかつたし、これから起きる気配もない。だから、人間は自分に出来るわずかなことをするしかないのだ。

「ねえ、智也くん」

形のいい瞳が涙で揺れて、覗き込んだ僕は吸い込まれそうになる。

「もう、私は泣かないから・・・。最後に思いつきり泣いてもいい

かな？」

そう言った姉さんの肩は、もう堪えられないくらい震えていた。それだけでなく、どうしてダメだなんて言うことができるだろう。

だから、確りと彼女に頷いて見せた僕は・・・もう一度、今度は出来るだけ優しく彼女を抱き寄せると、

「泣いていいんだ。僕の前なら・・・」と言った。

人生でこんなに優しく言葉を伝えようとした瞬間はなかっただろう。両腕の中で震える小さな温もりを感じながら夜空を見上げる。

春。銀色に染まった砂浜に二人の弟姉がいた。

彼女は本当に小さな子供みたいに、思いつきり声を上げて泣いた。

悲しくて、悲しくて仕方がないというように。まるで、今まで貯め込んでいた世界中の悲しみが彼女を通して一気に溢れてしまったように。

いつまでも、いつまでも・・・。

今夜、世界の涙は止まらなかった。

? memories (7)

夢を見たの・・・。

そこは色と音のない場所だった。

いや、正確には色も音もあるのだろうが、『無い』と感じてしま
う、そんな場所だった。仰向けになった後頭部越しに砂の擦れる感
触がして、視界に飛び込んでくるのは星、星、星。耳を擦る穏やか
な波以外、聞こえてくるのは姉さんの澄んだ言葉だけだ。

「いつだったか、もう忘れてしまったけれど。私は夢を見たの」

彼女の肌が直接僕の肌に触れ、高なる心臓と妙に気だるい感覚が
心地良かった。

「どんな夢なの？」と僕は訊く。

「たぶん、悲しい夢。ずっとずっと、誰かを待っているのだけれど、
その人は来ないの。それでも、私は待たなければいけないの。だん
だんと錆びて行く風景の中で、私だけがぽつんと取り残されていく。
・・・そんな感じ・・・」

「それは悲しい夢だね」

「そう、悲しい夢」

そう言って、姉さんの頬が僕の胸の上でプクツと膨らむ。

「たぶん、待たせていたのは智也くん」

下唇を不満そうに持ち上げて彼女は言う。

「どうして？」

「だって・・・」

そこで恥ずかしそうに姉さんは顔を背けると、さりげなく体を起して両手で自分の身体を隠した。

僕は服を着ていなかったから、そんな風に海辺で体を覆う彼女を見ていると、有名な絵画を思い出してしまふ。別に、その絵画の女神を美しいとは正直思ったことはなかったけれど、僕の目の前にいるヴィーナスはとっても美しかったし、エロティックだった。

「なかなか言えないものだね」と僕は言った。

「何を？」

「好きだってこと」

「そうね」

体を斜めに傾けた姉さんは僕の頬に手を伸ばす。

「どうして、私なの？」

「うん？」

どうして、と彼女はもう一度訊く。

「私のことを好きになってしまったの？」

そんな言い方をすると、姉さんを好きになったことが悪いことみたいじゃないか。僕はそう思った。

「なら」と僕は彼女のまねをして下唇を持ち上げると、「どうして姉さんは、僕なの？」と訊く。

彼女は形のいい顎を少しだけ斜めに傾けると、

「智也くんは、私が寂しい時に、怖いくらい傍にいてくれたのも。まるで、私の心が分かるんじゃないかって程」と微笑した。

「そうなの？」

大きく頷いて見せる姉さん。

傍にいて欲しいって思った時に、あなたはいつも一緒にいてくれた。

「これで好きにならずにいる方が難しいと思うの」

「そうかな？」

「きつと・・・」

頬を赤く染めて僕から海へと視線を移す彼女。

「きつと、あなたと出会った時から、こうなることが決まっていたんじゃないかって思えるくらい・・・今は、私が智也くんを好きに

なってしまったことが自然に思えるの」

「うん」

そう頷いて、僕は真つ暗な空に輝く月を見上げる。

金色の円。優しくて、澄んだ光。

たぶんこの世に神なんていないのだけど、それに近いものがある
とすれば、それは月なんじゃないかって僕は思う。地上にいるすべ
ての生き物の願い、涙、叫び、歓喜。それらすべてを受け止めてく
れる。

奇跡を起こしてくれるわけでもない。

特別な救いがもたらされるわけでもない。

きつと、唯、全てを見て、全てを聴いて、全てを受け止める。そ
れだけに過ぎないけれど、きつとそれがこの世界の神様の役目なの
かもしれない。

「どうして・・・」

風が僕らの間を通り過ぎて行った。潮の香りを含んだ海からの風
が。一瞬、彼女の栗色の髪が金色の光の中で揺れて、また静けさが
支配する。

「どうして、智也くんは私のことが好きになったの？」と彼女が訊
いた。

音のない静かな世界で、愛する人が砂浜に横たわる僕の瞳を覗き込む。たぶん、世界の果てがあるならばここに違いない。なんとなくそう思えてしまう場所で、彼女が僕に訊く。

「私はこんなに弱くなってしまった。未来もない。なのに、どうしてあなたは私を愛してしまったの？」

揺れる瞳が彼女の不安な心を見せてくれたから、僕は体を起して彼女の正面に向き合った。

ざらざらとした砂の落ちて行く感触。

目の前の姉さんは、僕の記憶にある彼女のよりもずっと儚くて、小さくて、弱くて。でも美しかった。

抜けるほど透明な肌には四つの傷跡。

僕はそれにそつと指先を這わせて、眉を寄せる。

「姉さんも言ったじゃないか。僕らがこうなるのは自然なことなんだよ」

「運命ってこと？」

「何度繰り返しても、同じ選択をしてしまう。そのことを運命というのなら、そうなのかもしれないね」と僕は言った。

長い髪が彼女の肩から胸元へと零れて行き、傷を隠すように僕の指先を覆った。

「私たちは姉弟なのには？」

「うん。それでも」

真剣な瞳。僕の好きな飴色の瞳が何度か瞬きを繰り返して、それは心を覗かれているみたいに深く透き通っていた。

「僕は姉さんほど、『魂のひどく美しい人』を知らないんだ」

「えっ」

彼女は何を言われたのか分らないという風に一瞬瞳を丸くすると、それってすごくキザなセリフね」と小さな声で笑った。

それにかまわず、僕はそっと彼女の胸から首筋に指を這わせて、「だから、姉さんが好きになった。そのことに後悔なんてないし、これからもしない」

「本当に？」

「うん」僕は力強く頷くと、「だって、この世界に奇跡なんてないのだから。神様はいないのだから。だから、僕らが姉弟だっていいじゃないか」と言った。

世界の果て。金の月と銀の砂。僕と姉さんしかない場所。

たぶん、僕にとってこの場所は完成されていた。不足ない場所だった。

「私と一緒にいることで、智也くんを不幸にしてしまうかもしれないな

いわ。それでもいいの?」

飴色の瞳がそう僕に訊く。

「僕にとっての不幸は、姉さんと一緒にいられないことだよ」

だってそうだろう?

姉さんがいることで、世界はこんなに完成されているのだから。

「僕は姉さんほど、魂の美しい人を知らない。そして、そんな姉さんを好きになった。それはどうしようもないことで、どうかすべきことでもない。だから、今は姉さんも僕のことを好きだと言ってよ」

「うん」と、彼女は小さく微笑して、「分かったわ」と頷く。

もう、何も必要なものはなかった。

ここには姉さんがいて、僕がいて、全てがそろっていたから。

だから、ずっと夢の中でポツンと佇んでいた彼女と、今は少しでも一緒にいたかった。

重なる肌と体温。

滑らかな感触が触れ合って、ゆっくりと僕は彼女を砂の上に押し倒した。

「ずっと待たせてしまったね」

色褪せて行く夢の中で、一人待つ姉さん。

僕はもう、離すことはないだろう。

絡み合う指先に吐息が交じり、彼女の言葉が僕に囁く。

『智也、愛してる・・・』

何度も繰り返されるその言葉は、もう僕の勘違いではなかった。

? sin (1)

*** : ***

「そんなことが・・・」

彼女は白いコートの前で両手を組むと、何かを懐かしむようにそう言った。

「まあ、姉弟だったから。そんなことでもない、愛し合うようにはならなかったと思うけれど」

だから、と僕は彼女の飴色の瞳を見つめて、

「今でも・・・君とのことを、本当に素直に喜ぶことはできずにいるんだ。君の不幸がなかったら、僕たちの関係は変わらなかったはずだから」と言った。

七色の光。小さな教会のステンドグラス。僕らはちょうどその赤子を背にして座っていた。

「あなたは辛い思いをしてきたのですね」

でも、僕はその言葉に静かに首を振る。

「単に辛いというのとは違うんだ。君は僕の世界そのものだったから・・・。悲しいことだって、嬉しいことだって、全てを受け止めないといけなかった」

「それは辛くなかったのですか？ 今の話だと・・・その、私の状

態はすごく悪いようですが」

その言葉に、ぼんやりと思いを過去に馳せる。

「もう、忘れてしまったよ。僕はただ君と一緒にいたくて、必死だったのだから」

そう。もう、忘れてしまったよ。

君がいなくなつて、ずいぶんと一人色褪せた夢の中に置き去りにされていたのだから。

もう、忘れてしまった。

ぼつり、ともう一度、そう言葉を漏らした僕に舞は白くて細い手を伸ばす。掴まれたせいでつぶれるジャケットの袖。見上げる瞳が申し訳なさそうに僕を見つめる。

「私は憶えていませんが、あなたを感じることはできます。私にとって、あなたが大切な存在であることは分かるんです」

七色の光が栗色の髪を照らし、揺れる蝋燭の明かりが瞳を揺らしていた。あの時のまま。僕の知っているままの姿で舞は隣に座っている。もう、ずいぶんとあれから時間が経ってしまったというのに。

「君は変わらないね」と僕は言った。

「そうでしょうか？」

「うん。変わっていない」

「あなたは変わったのですか」

彼女の手には、自分の手を重ねて、ひやりとした感触に彼女が冷え症だったことを思い出して懐かしく思う。

「もう、忘れたよ」

「それでも、この場所に來たのですね」

「・・・っ」

その一言に、僕は微かな驚きを感じる。

「約束・・・憶えていたの？」

「いえ」舞はすまなそうに頭を振ると、「今、思い出したんですよ。他のことはまだ分からないままですけれど」と小さく笑った。

「そう。思い出したんだ」

約束。

僕と舞が交わした約束があった。

それは約束と言うには一方的過ぎて単に僕が押し付けただけだったけれど、舞が憶えていてくれたこと、思い出してくれたことに嬉しくなる。

「気がついたらここにいたから、どうしてだろうと思っていたんで

す。でも、それはあなたとの約束があったからなんです」

「そっか。随分と待たせてしまったね」

「ええ。随分待ちました」

でも、僕だって長い時間一人で取り残されていたのだから、お互い様だと思う。

「長かったです」と舞が言って、

「そうだね」と僕が答える。

「一人は寂しかった？」

「ええ。寂しかったです」

蝋燭の明かりが静かに揺れて、扉の外で強い風が通り過ぎて行った。今日はクリスマスなのにこの教会には僕と舞しかなくて、世界はもうずっと前に終わってしまったんじゃないかって思えてくる。

でも、思えば、僕の世界はずっと前にすでに終わってしまった。

そして、終わった世界に一人残されるのは、想像以上に辛くて苦しい。それでも、錆びついていく夢の中に佇む僕はどうすることもできないまま、唯、待っていたんだと思う。・・・舞を。

「話の」と彼女が言った。「話の続きを聞かせてくれませんか？私とあなたの物語の続きを」

白いコートから零れる白いレース。その間に長い髪が流れて。僕はそんな彼女の姿に目を細めながら、繋いだ手をもう一度握り直す。

寒い夜。本当に死んでしまいそうなくらい寒いクリスマスの夜だったけれど、僕の隣には舞がいてくれたから少しも寒いと思わなかった。

「確かあれは・・・」

そう言っ僕は白い息が蝋燭の中で揺らめくのを眺めながら過去の扉に手を掛ける。もう、錆びついて、色が褪せてしまった記憶だけど、掛替えのない大切な時間に、忘れることのできない瞬間に。

夜が明けるまで、まだ時はあるのだから・・・。

：***

? sin (2)

コツン、コツン、と音を立てながら、舞は僕の一步前を歩いていく。煉瓦造りの歩道を踵が蹴って、珍しく左右二つに分けたポニールが弾んでいた。そう言う髪形は、確か、ツインテールと言うのだったろうか。

冬の街。

まだまだ寒い僕らの街。

今日僕らは、見慣れたこの街の中を歩いて回るといふ、小さな旅に出かけていた。

本当はもっと遠くの旅館とか、ホテルとか、ペンションとか、そういうところに旅行にいくつもりだったのだけど、舞の体調を考えて散歩とも言えるこの小旅行に変更した。彼女が倒れたのが寒い冬の真中だったように、寒さは体調を悪くするみたいだった。もちろんそれはほんの小さな変化だったけれど、僕が見逃すはずが無い。あったかい季節がまた巡ってくるまで、少し辛い季節。彼女自身は大丈夫だと言い張ったけれど僕はやっぱり心配になって、不満そうに下唇を持ち上げる彼女を説得したのだった。

「また、夏がやってきたら行こうよ」

そう言う僕を、恨めしそうに見つめた舞は、

「本当に？」と何度も確認を取っていた。

「本当、本当。僕だって舞が心配だから言っただよ」

「それは分かってるけど・・・」

智也は心配しすぎだよ。

そう小さな声で言ったのは僕に聞かれない為なのだろうか。

「だって、もし遠くに出かけて倒れたりでもしたら大変じゃないか。だから冬はやめておいた方がいい」

「大丈夫よ」

「でも、『一番リラックスできるから』って理由で、家での療養を認めてもらっているんだから・・・旅行になんて出かけたら・・・」

ふう、と溜息を吐く舞は、僕のベッドの上で膝を抱えてつまらなそうに体を揺らした。そんな様子を見ると、どっちが年上なんだか分からない。

「今までだって大丈夫だったのに」

「でもねえ・・・」と僕は眉を寄せる。

確かに彼女が一様の退院を認められてから、特に大きな病状の变化は無かった。けれど、やっぱり初めての旅行ともなれば不安は絶えない。

「智也は私と旅行したくないの？」

小さなテーブルを挟んで丁度真向い。顎を少し引いて僕を上目で

覗く彼女は、計算してやっているんじゃないかって思えてしまうほど、見ていて切ない表情をする。

「もちろんしたいに決まっているよ」

「なら・・・」両足をベッドから放り出して、舞は言う。「一緒に旅行に行こう。だって、約束したじゃない。今度の週末に旅行に出かけるって」

「・・・」

今思えば軽率だった。

軽い気持ちで交わした言葉というのは、いつも後で後悔させられるのだ。そもそも、一緒に旅行に行こうと言いだしたのは僕の方だったし・・・。その時の考えの足りない自分自身を、殴ってやりたいとさえ思う。だから、僕は一つの提案をする。

「分かった。いきなり遠くに出掛けるのは心配だから、少しずつ距離を伸ばしていくというのはどう？」

「どうということ？」と舞。

「最初は家の近所から初めて、だんだんと遠くに目的地を変えて行くんだ。そうして、僕らが二人で安全に行ける距離を段階的に確かめて行けばいい。どう？」

人差し指を唇にあてて天井に視線を泳がせていた舞は、ここら辺が妥協点と判断したのか、

「うん。それでいいよ」と微笑してくれた。

そう言うわけで、今僕は街の散策を行っている。

「今日は天気がいいね」

少し前を歩く舞が首だけ振り返ってそう言った。

「うん。絶好のピクニック日和だよ」と僕は答える。

「智也？」

「ん？」

クルリとコートの裾を宙に浮かせて僕に向き直った舞は、
「今日はピクニックじゃないのよ。旅行よ、旅行」と何故だか嬉し
そうに言う。

本当は旅行でも散歩でもピクニックでも、呼び方なんてどうでも
いいような気がしたけれど、きつとほとんど外に出ることのない舞
にとっては大切なことなのかもしれないと思う。

見飽きてしまった街の風景。おなじみになっている店。

ここにあるもので知らないものなんてないのかもしれない。だっ
て、僕らはこの街で育ったのだから。けれど、舞はそんなありきた
りの世界を楽しそうに歩いて行く。

コッソ、コッソ・・・。

弾む踵を鳴らしながら。

「ねえ、あそこでお昼にしない？」

丘を指さす舞。

青い空へと伸びて行く煉瓦の道。左右均等に背の高い街灯が整列して、小さな教会が佇んでいる。彼女はその向こうを指さしていた。

「あそこって墓地じゃなかった？」と僕は訊く。

「そうだったかな？」

彼女は少しだけ何かを考えて視線を宙に投げると、

「でも、いいんじゃない？ 見晴らし、よさそうだし」と笑った。

ちょうど、丘の方から流れてくる風が僕らを追い越して行つて、長い髪が舞の表情を隠す。

「ね。そうしよう」

再び現れたのは楽しそうに笑う子供のような瞳だった。

全く仕方がないと思う。こういう顔をされると、僕は何も言えなくなってしまう。きっと、墓地でお弁当なんて非常識だし、怒られるかもしれないけれど、それでもいいかなとか思ってしまうのだ。

「ほらほら」

楽しそうに急かす舞の背中を追いかけて、僕は煉瓦を蹴っていく。

そんなに急ぐと体調を崩すんじゃないかって少しだけ心配になったけれど、今のところ大丈夫そうだった。

弾む足音と跳ねる呼吸。

坂になって見えなかった丘からの眺めは、突然僕らの前に姿を現した。

「うわぁ」と、目の前で立ち止まった舞が声を上げる。

「うわぁ」

つられるように僕もそう言った。

「・・・こんなに綺麗なところがあるなんて知らなかったわ」

「そうだね」

空に向かって伸びる歩道を登ってたどり着いた丘は、目の前いっぱい海と空が広がっていた。

見渡す限りの青、青、青。

確かにそこら中に墓石が建てられていたけれど、それでも陰鬱な感じはしなかったし、むしろ清々しかった。足元には緑の芝が敷き詰められていて、崖になっている先から見えるのは海と空だけ。きつと死に行く者が良い景色の見える場所に弔われることを望んだから、こんな場所に墓地を作ったのかもしれない。

「いい場所だね」と舞がうっとりと言う。

「ほんと。墓地があるってことは知っていたのにね。こんなに眺めがいいなんて・・・知らなかったよ」

まるでそこは、世界の限界だった。

僕らの世界の終着点。

この先は空と海だけ。

「ううん」と舞がくぐもった声を出し、芝生の上にそのままコロんと仰向けになった。

「空があんなに近いよ。智也」

「空が近い？」

ほら、と言うように、舞は自分の隣をポンポンと手で叩いて見せた。そうするのは、傍においでと言う合図だ。

「ほんと、空が近い・・・」

「そうでしょ」と彼女が瞳を細めて隣に並んだ僕を見る。

「うん。なんかこうしていると、空に手が届きそうな気がするよ」

舞と同じように芝生に仰向けに寝そべって、右手を思いっきり青に伸ばして見る。そこには、在るようでない、近いようで遠い、広い、広い空。

「僕たちが見るもので、一番遠くにあるものってなんだか分かる」
ぼんやりと僕は訊いてみる。

「そうね」

隣からのんびりとした声が上がリ、
「なんだろう。太陽、月、星。そんなものかしら？」と。

ふわりと風が丘を駆け上がり、隣の彼女から甘い香りが僕の鼻腔に届く。果物みたいな、甘い匂い。

「うん。正解だよ。僕らの視界にとらえることのできるもので、最も遠くにあるもの。それは全部空の中にあるんだ」

「そう言われてみれば、そうね」

「だから、人は空を飛びたいと思うのかもしれないね」と僕は言った。

自分で確認することのできる最も遠い場所。それは自分の世界の限界。生まれたときから傍にあり、でも決して行くことのできない場所。だからこそ、人は空を飛びたいと思うのだろう。自分の世界の限界を知りたいから。

「智也は、時々面白いことを考えるよね」

舞は落ちてくる前髪を払いながら、隣にいる僕を見る。飴色の瞳が栗色の髪から覗いて、いたずらっぽく光った。

「そう？ 舞ほどじゃないと思うけどね」

「そんなことないよ。なんか、哲学者みたいに不思議なことを・・・でも詩人みたいにロマンティックなことを、言っわよね。普段は身も蓋もないリアリストなのに」

「それ、褒めてるの？」

何となしに訊いた僕に、

「たぶん」と彼女は舌の先をちよっぴり出した。

その時、心地よい風が舞の声を拾って過ぎて行った。僕らの知らない、見たこともない遠くの街へと。今、僕らの旅は、この小さな街の小さな墓地までだけれども、いつかもっと遠い世界に行けたらいいと思った。隣の街を超えて、山を超えて、海を超えて、この風すらも追い越して。そうしたら、いつか空へとたどり着けるかもしれない。

僕らの世界の限界に。

「ねえ」

真っ青な空を見上げたままの横顔がそう言った。僕はその白い頬を人差し指でなぞって聞いているよ、と合図を返す。

「智也は、知ってるかな？」

私たちの頭の中はこの大空よりも広い

ほら、二つを並べてごらん

私たちの頭の中は大空すらも、やすやすと容れてしまう
そして、あなたまでをも

私たちの頭は海よりも深い

ほら、二つの青と青を重ねてごらん

私たちの頭は海を吸い取ってしまう

まるでスポンジがバケツの水を吸い取るように

私たちの頭は神様と同じ重さ

ほら、二つを正確に測ってごらん

違うとすれば、それは・・・

言葉と音の違いほど

遠くからやってきた潮の風が、空に向かって伸ばした彼女の指の間を、音を立てて通り抜けて行った。近くに佇んでいる葉のない木の枝が転寝に音を立て、温かい日差しが真っ青な空から僕らを見ている。

「エミリー・ディキンソン」

言葉を切った舞は、そう異国の名前を僕に教えてくれた。

「生きている時はたった七つの詩しか世に出なかったのに、今では千七百篇もの作品が知られているの」

「それ、少しだけ聞いたことがある様な気もするよ」

「うん」

伸ばした腕がコートの袖からむき出しになり、彼女の白い肌が青の中に投げ出される。

「この詩を思い出すと、自分が悩んでいることとか、苦しんでいることが、本当に小さいことのように思えてくるの」

「そうだね」

「私には智也もいるし」

「うん」

だから、と彼女は笑った。

「きっと私にもこの大きな空よりも広い可能性があるのかもしれないわ。いいえ。私・・・ではなくて、私と智也に」

「うん」

「私だけじゃ足りないかもしれないけれど、でも、智也がいてくれるから」

「そうだね。僕がいるから」

そう言っ、伸ばされた手に自分のものを重ねる。真つ青な空に投げ出される二つの腕。太陽の穏やかな光に包まれて、僕らは手をそつと繋いだ。一人では得ることのできなかつた時間がここにはあって、きつと僕らはこれからずっとそれを大切にしていくのだろう。

世界の限界で繋がれた僕らの心。

二人の想いはこの大空よりも広く、海よりも深く。そして、神様と同じ重さだった。

? sin (3)

「あつ、雨」

学内にある図書館から出た時、僕の目の前を一筋の水滴が落ちて行つた。目を細めれば、どこまでも続く雨の縦ラインがアスファルトを黒く湿らせている。見上げた空は憂鬱なほど灰色で、歩道を歩く学生たちはチョロチョロと、腰を曲げて足早にどこかに駆けて行つた。それは、空が今にも落ちてくるんじゃないかって脅えているみたいに思える。

一度大きな溜め息を吐いた後、たまたま持つて来ていた傘を取つて憂鬱な空に向かつて広げる。そうすると、モノクロ映画の中で花だけが、真つ赤に塗られたみたいだった。何故なら持つて来ていた傘は、舞のチューリップ色の傘だから。

どうして、真つ赤な色をチューリップ色と言うの？

僕がそう舞に訊いた時、ちょうど文庫本を読んでいた彼女は大きな瞳を瞬かせて、

「だって、その方が可愛いと思うでしょ？」と訊き返した。

どうしてそんなことを、とでも言うように瞬かせる睫毛が長いから、もしかしたらパシパシと、近づいたら音が聞こえるんじゃないかって思ったのを覚えている。のんびりと日溜まりの中でくつろいでいる彼女の髪が金色に揺れて、珍しく掛けた眼鏡が少しだけ印象を変えていたから、僕の鼓動は少しだけ早くなった。

そうして、その時から赤色は僕の中でチューリップ色になった。

僕にとって舞が赤と言えば赤だし、チューリップ色と言えば、たとえそれがまったくそぐわない色だったとしても、チューリップ色になるのだ。本当に自分でも困ったものだと思うけれど、こればかりはどうしようもない。

「それにしても、チューリップ色の傘はないよな」

なるべく縁を深くして、真っ赤な傘を差している僕が外から見えないようにした。だって、こんな色の傘を男がしているなんて、恥ずかし過ぎる。

『智也？ 傘持っていないかと・・・今日、降るらしいよ』

玄関先に見送りに出た舞。大きめのカーディガンを着て、眠そうに瞼を擦る彼女が僕に寄越したのはこの傘だった。

「いいよ。どうせ降らないだろうし」

「ダメだよ、そんなこと言って。今日は雨が降るって、天気予報で言っていたもん」

そう言われて目を細めた空は、雲一つない快晴で眩しかった。

「どうせ外れるんじゃない、天気予報。いつも外れてばかりだし」

僕は晴れわたる空の下、傘を片手に帰宅する面倒を考えて彼女の手を押し返す。でも、何故だか時々頑固になる彼女は、

「ダメだよ。雨が降ったら智也風邪引いちゃうでしょ。降らなかったら持って帰ってくればいいんだし、ちゃんと持っていきなさい」
とお姉さんらしいことを言ってくれたのだ。

吹いてきた北風に体を小さくしながら、僕はポケットに片手を突っ込んで朝の舞に小さく感謝する。

「でも、自分の傘を持って来れば良かったなあ」

チューリップ色の傘なんて、男が差すもんじゃないから。

ジャケットのポケットに空いた方の手を入れて、もう片方で傘を持つ。行き交う人のほとんどが、突然変わった空の機嫌に、慌ただしく道を駆けて行った。僕はその中を、チューリップを咲かせて歩いて行く。パシャリ、パシャリ、と雨の道を踏みしめながら、ゆっくりと、ゆっくりと。

ちょうど、校門を出て自宅への帰り道。丘に続く上り坂を登っている時だった。真っ白い顔で空を見上げている七瀬を僕が見つけたのは。

目が合った瞬間、お互いにしまった、という顔をした。別に何が拙いと言うわけではないのだけれど、それでもこんな雨の日に不意に出会いたい相手では、彼女はなくなっていた。七瀬もきつと同じ気持ちなのだろう。狭い軒下にいる彼女は、着ていたコートの肩をすっかり雨に濡らして、湿った前髪を小さな額に張り付かせていた。

「傘……忘れたの？」

どうするか一瞬だけ迷ったけれど、僕の方から彼女に声を掛ける。

「よかったら……狭いけど一緒に入る？」

小さく頷いた七瀬の方に傘を半分譲ってスペースを作る。背の低い彼女は少しだけ躊躇ったように靴の先を迷わせたけれど、ありがとう、と言って隣に並んだ。下から覗く瞳が微かに揺れて、寒さに色を失った唇が震える。

「久しぶりな気がするね」

コツン、とレンガを彼女のブーツが叩いて雨の街に踏み出す。

「そうだね。前はいつも一緒だったから」と僕は言った。

「うん。最近是一緒に帰らないもんね・・・」

確か、前回まともに話をしたのは階段でのこと。あれから僕はずっと会話という会話をしなかった。いや、できなかったと言った方がいいたろうか。

もちろん、必要な時には口をきくし、顔を合わせれば挨拶ぐらい交わす。でも、二人きりになって話をしたことはなかったし、まして肩を並べるなんてこともなかった。はたから見たら少しの変化だろうけど、僕らの関係は決定的に変わってしまった。だから、顔を合わせるのが久しぶりに感じるのかもしれない。まだ、あの日からそれほど時間は経ってないと言っているのに。

「ねえ」と小さな声で七瀬は言った。「皐月くんは、雨、好き？」

坂の上から流れてくる雨水を足の縁に眺めながら、以前もそんなことを訊かれたことがあったな、と思う。

「いや。好きじゃないよ。雨が降ると寒いしさ」

「そう。私は好きなんだけどな」

白い横顔がどこか遠くを見ながら、残念そうにそう言った。

「晴れた青い空は、好きじゃないの？」と僕は訊く。

「うん。なんだか気味が悪いから」

「気味が悪い？」

訊き返した僕に、彼女は口の端を上げて笑うと、
「だって、あんなに掴みどころのない青がどこまでも広がっているんだよ。それは、凄く気味が悪くて私は怖くなる」と言った。

其処に在るのか無いのか、深いのか浅いのか。そんなことすら分からせてくれない青が自分の頭の上にあり続けるなんて……。それよりも、雨を落としていく厚い雲が空を覆っている方がずっといい。

七瀬の長い睫毛が水滴に光って、頬を涙のように伝って行く。

「そんなこと考えたこともなかったよ」

「うん、普通はそんなこと考えないよね。たぶん、私くらいだと思うよ、そんな陰気なことを思うのは。誰だって爽やかな青空の方が好きだよな」

彼女はまた口の端を片方だけ上げて笑った。なんだか、声に力がないように感じるのは気のせいだろうか。

「私、子供のころ思ったの。もし、空が落ちてきたら大変だつて。それはね、もう、本当に心配してたんだ。子供のちっちゃな頭でいっぱい考えてね」

でも、ある時気がついてしまったの。

「周りの大人たちは、誰もそんなことを気にしてないってことに。子供にとって、大人は何でも知っていて、何でもできるすごい人じゃない。だから、そんな人たちがこんなことに気付かないなんてどうしてだろうって思ってた」

チューリップの外には灰色の雲。うす暗い空から降ってくるのは絶え間ない雨。皆が隠れるように家の中に入ってしまった、時々車が僕らの横を走り抜ける以外は、何の気配もない坂がどこまでも続いている。

「それで、七瀬はどうしたの？」

なんとなく僕はそう訊く。

チラリとこちらを見た彼女はつまらなそうに踵をレンガにぶつけて、

「どうもしないよ。唯、私はそのことを考えるのをやめただけ」と言った。

「そうなんだ」

彼女の肩が僕に当たって、また離れる。それほど大きくない傘に二人だったから、僕も彼女もすっかり濡れてしまっていた。たぶん、七瀬もそのことに気づいていたのだろうけど、決して傘から出ると

は言わなかったし、僕も気付かない振りをした。だって、もしそれを言ってしまったら、それは別れの合図になるから。

しばらく無言で足を進める。

どちらかが何かを言ってしまえば、もう話すことはない。語ることではない。そんな重たい雰囲気は僕らの間にはあった。けれど、二人ともどうしたらいいのか分らない。そんな感じた。

「たぶん、その時から私は、自分を他人に合わせようとし始めたのかもしれない」

沈黙を破ったのは七瀬。湿った長めのポニーテールが力なく揺れて、僕の肩にあたった。

「だから、私は自分の気持ちに嘘を吐くのが得意なの」

そのはずなの。

彼女の足音が止まって、僕のジャケットの裾が引つ張られる。傘からはみ出した七瀬は、雨に晒されながら僕の袖を遠慮がちに捕まえていた。

「どうしたの？」と僕は振り返った。

チューリップから灰色の空へ。彼女は僕を濡れた前髪の隙間からじつと見て、

「得意なはずなのに、どうしてか、あなたのことだけは忘れること

ができないの。自分の心に嘘を吐けないの。『友達として』なんて言っておいて、こんなことを言うのはおかしいけど、ここがずっと痛い」と笑った。

彼女の掌が置かれた胸。次から次に空から落ちてくる雨が、当たっては弾けて行く。

きつと彼女は泣いているんだと思った。

頬を伝うのは涙なのか、雨なのか分からなかったけれど、たぶん彼女は泣いているんだと思った。笑顔を一生懸命に張り付けてはいたけれども、痛々しいくらいに引き攣った表情は、もう『笑顔』なんて呼べるものじゃない。

「臯月くんが悪いんじゃないのは分かってるの。でも、どうして私を選んでくれないのか・・・そのことが悲しくて、悲しくて仕方ないんだあ」

「僕には好きな人がいるから・・・」

「でも」と彼女が言った。「その人は臯月くんのこと、好きじゃないんでしょ？ 片思いなんでしょ？ なら、とりあえず私と一緒にいればいいじゃない？」

雨にすっかり濡れてしまった彼女に、僕は傘を差し出す。狭い傘に二人。傘の影に隠れた彼女の瞳が、猫のように僕を見つめた。たぶん、胸が千切れそうに痛いのは、嘘を吐いているから。そして、これからも付き続けるから。

「そんなこと、できないよ。だって、七瀬はこんなに真剣なんだか

ら・・・」

「皋月くんは優しいだね」と彼女が苦笑した。

「そんなことはないよ」

「うん。優しいけど、優しくない」

彼女の人差し指が僕の胸を刺す。

「もう、優しくしないでいいから。友達なんて、やっぱり無理なんだよ。だって、私のココはこんなに痛いんだから」

押された胸が彼女の指に合わせて皺を寄せた。

きっと、僕が微かに後ずさってしまったのは、七瀬の力が強かったからじゃない。指先に込められた想いに、気落とされたからだと思う。

「ねえ」と七瀬は言った。「私は、皋月くんのことを忘れるように努力するよ。たぶん、そうするしか方法はないから。だから、皋月くんはその好きな人と絶対一緒になつてよ」

「・・・」

「だって、そうじゃないと、何のために諦めたのか分らないじゃない。だから、絶対に皋月くんはその恋を叶えてよ」

「・・・」

僕は何も言えなかった。唯、雨音が耳にうるさいくらいに響いて、体が金縛りにあつたみたいに動かなかった。真つ白な七瀬の顔が、暗い街の中で僕の瞳を捉えて離してはくれなかったから。

「じゃあ、もう行くね」

七瀬はそう一言、言い残すと、突然、坂の向こうに駆けて行った。何も話す言葉を持っていない僕を置いて、ポニーテールを揺らしながら。

これで終わりでいいのだろうか？

僕はどうしたらいいのか、どうすべきなのか分からないまま、彼女の去っていった方をぼんやりと眺めた。そして、心の痛みに耐えかねるように、気付いた時には七瀬の背中を追いかけていた。

? s i n (4)

「どうして・・・？」

背を向けたままの七瀬がそう訊いた。

「分からない」

「もう、皐月くんのこととは忘れるって言ったじゃない。どうして、追いかけてきたの？」

波打つ海をいくつもの波紋が駆けて行った。止むことを忘れてしまった空は、次から次へと雨を落としていく。灰色の雲と、機嫌の悪い海。

「七瀬が・・・」と僕は言いかけてやめる。その後につける言葉が見つからなかったから。

「言ったじゃない。誰にでも優しいのは優しくないのと同じなんだって。皐月くんの優しさは、私には辛いんだよ」

力なく垂れた黒いポニーテールの先から、重みで耐えきれなくなった雨が一定の間隔で落ちて行くのが見えた。僕は彼女に傘を向けようとして、やっぱり途中でやめてしまう。その小さな肩が、僕を拒絶するように震えていたから。

何をしようとしても、僕は中途半端だった。七瀬に掛ける言葉も、行動も、気持ちも、全部中途半端。

「臯月くんは私のことを振ったんだよ。どうしてこれ以上私に関わろうとするの？ その好きな人と一緒になることだけを考えなよ」

「でも・・・」

その時、振り向いた七瀬の瞳は見たことのないほど鋭く、怒りで燃えていた。

「『でも』じゃないよ！ どうして？ どうして私を苦しめるのよ。もうそつとしておいてよ！」

嗚咽を含んだ叫びが打ち寄せる波と混じり合い、突き放たれた言葉が心を叩いた。もう終わってしまうんだって、もう取り返しは付かないんだって、気付いてしまふ。それはひどく悲しいことだった。

「分かった」

奥歯に力を入れて、僕はそう言った。何が分かったのかも分からないまま。

視界を雨が遮って、頬をヒンヤリとした感触が伝い始めた。後から後から絶え間なく落ちてくる雨に、七瀬の姿がグニヤリと歪んでいく。

「どうしてそう言う顔をするの？」

怒っているのか、悲しんでいるのか、憐れんでいるのか。そのどれもが含まれる声で、彼女がそう訊いた。

「私だって、勇気が必要だったのに。苦しい思いをしたのに。なのに、どうして皐月くんが泣いてるのよ」

「えっ」

僕は自分の頬に手をやって雨を拭う。

どうして七瀬は僕が泣いているなんて言うのだろう。これは雨なのに、唯、空から流れてきた冷たい雫なのに。むしろ泣いているのは七瀬の方じゃないか。

「僕は泣いてないよ。雨が目に入っただけ。唯、それだけだよ」と笑って見せた。

次から次に流れてくる雨が頬を濡らして、これじゃ勘違いされても仕方ないじゃないかと、慌てて拭い続ける。彼女は僕をジッと見つめた後、瞳を切なく細めて、

「皐月くんは、傘を差しているじゃない」と静かに言った。

「えっ」

確かに僕はチューリップ色の中にいた。表面を静かに打つ音が広がる骨の先から零れ落ちていく。そうか、僕は本当に泣いているんだ……。そう自覚した瞬間に、鼻の奥の方がゆっくりと熱くなっていく。

「どうして？ あなたは私のことなんてどうでもいいんでしょう？ 他の女を選んだんでしょ？ どうして、そういう顔をするのよ。私がこんなに辛い思いをしているのに、皐月くんはまだ苦しめるつもりなの？」

そう言っ て肩を震わす七瀬を見て、初めて気付いた。僕の知っている彼女はこんなに弱くて儚い女性だったのだと。押し寄せる強い波の粒に攫われてしまいうなほど、目の前に佇む彼女は依りどこのない存在だった。

だから、七瀬が以前に僕に言っ た言葉を思い出した。

『誰にでも優しいのは優しくないと同じ』。それは本当だったのだ。もし、僕の優しさが彼女をこんなにも苦しめているのなら、それは優しさではない。

一度伸ばそうとして宙を搔いた右手をジャケットに押し込むと、僕は前髪に隠れてしまった彼女の瞳を探しながら、

「もう優しくしない」と言っ た。

ハッ と彼女が息を呑むのが分かった。

「もう、七瀬と僕は他人だ。単なる同じ大学の生徒。これからは、そういう関係として接するよ」

「わ・・・っ た」

嗚咽で声を詰まらせながら七瀬は頷き、これが最後であることを自覚する。

急に今までの彼女と過ごした記憶が頭を過っ て、胸がキリキリと音を立てる。

すっかり雨に濡れてしまっ た七瀬。冷えて真っ白になっ た顔から、

整った瞳が僕を見つめていた。紫色の唇が言葉にならない音を何度か作ったけれど、結局何も言うことはなかった。

灰色の空。土砂降りの雨。機嫌の悪い海と冷たい冬の風。

一度静かに空気を吸い込んで、痛む心臓に酸素を送り込んだ。

「さようなら・・・七瀬」

泣き崩れる彼女の声に、心の半分が消えてしまった。けれど、一度背を向けた僕が振りかえることは、決してなかった。

? broken wings (1)

*** : ***

両腕で体を覆い、寒さに体を小さくする舞。時折大きく吐き出す息が煙の様にクルリと舞って、視線の先で消えていった。燈されている蝋燭の炎が微かに揺れる。

「あなたは七瀬さんが好きだったのですか？」

高い天井に投げ出した彼女の声が辺りに響く。三回ほど耳に同じ言葉が届いた。

「たぶん、好きだったと思うよ」と言いながら、チラリと彼女が視線を外したのを確認する。

「僕は七瀬が好きだったと思う。それは決して恋ではなかったけれど、でも好きだった。たぶん七瀬が男だったら、良い友達として長く付き合うことになったと思う」

「でも、彼女は女性だった」

「うん。だから、僕と七瀬の関係は終わってしまった」

小さな溜息が横から聞こえた。

「私とあなたは姉弟だったのに・・・それでもあなたは私を選んでしまったんですね」

舞は他人の様に自分のことを話すんだな。そう思うと今更ながら
少しか胸が痛んだ。こうして二人で並んで話していると、昔に戻
ったみたいに感じるから。

「今でも思うよ。僕が君に出会わなかったらどうなっていたのか？
もし君が病気にかかることがなければどうなっていたのか？ そ
んなくだらないことをね。そこには今より幸せな未来が待っていた
のかも知れない。悲しいことも、苦しいことも、後悔もないのかも
知れない」

無言で頷く瞳に目を細めて、

「それでも、僕は君と一緒にいたかったから」と言った。

思えば、唯、それだけだった。理屈や理性。そんなものはどうで
もよかった。唯、舞と一緒にいたかった。それだけ。

「でも」と彼女は白い息を吐いて、「それで、あなたは良かったの
ですか？ 私はあなたの隣からいなくなったのに」と訊いた。

二人の繋がれた手は体温を分け合い、お互いの鼓動を感じさせる。
彼女の一言は、それが永遠でないことを僕に思い出させてしまう。
心がトクンと音を立てて跳ね、下ろした瞼の奥で瞳が痛んだ。

「うん。良かったんだ」

そう静かに言った。確信を込めて。

「僕にとって君は全てだったのだから。最初から他の未来なんてな
かった」

栗色の髪がオレンジの光に天使の輪を作り、流れるように白いコートに落ちていった。あの時と全く変わらないままの姿で彼女は僕の隣に座っている。もう、ずいぶんと時間が経ってしまったのに。両手を目の前に翳して、年月を帯びた指を眺めた。今の僕は時間に逆らえず、すっかり年を重ねていた。これでは姉弟の立場が逆だと思った。

「そうやって、あなたはずっと一人で生きてきたんですね」

そう彼女が微笑する。その笑みには、悲しみとか、憐みとか、慈しみとか、愛情とか、そういうものがいっぺんに詰まっていたから、心の一部が懐かしさに甘い痛みを感じる。

「でも、こうしてまた会えたじゃないか」

「それも、夜が明けるまでですよ」

「そうなの？」

舞は小さく顎を引き、手に力を込めた。

「今夜はクリスマスですから、特別なんです」

「それでも構わないよ。僕はもう二度と君に会えないと思っていたから」

「そうですか・・・」

教会の外を強い風が駆けて行った。遠くの方で木の枝のぶつかる音がする。微かに震えたように見えるステンドグラス。七色の影が

彼女の白いコートを揺らして、彼女が少し驚いたように目を大きく開いた。

「あの日も、こんな風が時々吹いていたよ」

「あの日？」

僕の言葉に首を傾げる舞。

「君と僕が離れ離れになった日」

無言で話の先を促す舞に、僕は唇を小さく震わせた。本当はあまり思い出したい記憶ではないのだけれど、それでも彼女には話さなければならぬ。二人の物語の続きを。
彼女だからこそ。

そっと胸の端にしまった棘に触れるようにして、僕は話始めた。

***：

? broken wings (2)

『舞』。彼女の名前の由来は、その季節。

二月の特に寒かった日。雪が次から次に空から降っていた。それはやむことを忘れたように限りなく、地上の全てを真っ白に塗り替えてしまいそうなくらい止めどなく降っていた。

純白の世界。

そこに彼女は舞降りて来た。まるで穢れを知らない赤子を包むように、小さな病院の外は真っ白だった。

羽の様な雪の『舞う』日。

『舞』は生まれた。

「だから、私の名前は『舞』なの」

冷たい風の吹く夜。思い出のように冬の厳しさが僕らの街に帰って来た夜。僕と舞は教会の長椅子で話をしていた。

二月の寒い日。舞の生まれた日。

今日は彼女の誕生日で、その日と同じくらい寒い日だった。

「私としてはもっと可愛い名前が良かったんだけど……。でも、その日から私は『舞』になったの」

そう彼女は静かに言った。

小さな頭が僕の肩に預けられる。ジャケット越しに徐々に広がっていく体温が優しく、そつと彼女の髪を指先で捕まえた。差しこんでくる七色の光が、髪に合わせて形を変える。

「それなら」と僕は言った。「舞は寒いのは得意なの？　ほら、寒い季節に生まれた人は寒さに強いって言うから」

「全然。関係ないみたいよ、それ」

掠れる声が面白そうにそう言った。

「なら、暑いのに強いのか？」

「暑いのも苦手だわ」

「うん。知ってる」

大きな飴色の瞳が瞬きを繰り返し、
「智也も八月に生まれたのに、暑いのも寒いのも苦手じゃない」と
憤ましく笑った。

ここは教会だから、高い天井に声が響かないように舞は小さな声で話した。僕もそれにつられるように小さくする。

蝋燭の灯り。月の明かり。

この場所はあまり明るくないから、小さな声でも耳に心地よかった。たぶん、視覚が働いていない分、耳が敏感になっているからか

も知れない。

「ところでさ」とステンドグラスを見ながら、「今日は誕生日なのにこんなところで良かったの？　せっかくだから贅沢して、日ごろ入れない様なレストランとかでも良かったんだよ」と訊いた。

赤子と女性、そして、大きな翼を持った男がビー玉の様な瞳で僕を見る。

「うん。ここに来てみたかったから」

「クリスチャンでもないのに？」

「うん」

何となく、ね。

アルトの柔らかい声がそう囁いた。

「たまには神様に感謝したくなるじゃない？　こうやって幸せに生活出来て、智也と過ごせて、愛されて。色々と幸せだって自分で思えることがあるんだけど、それを感謝したくなるのよ」

「神様なんていないのに？」

「そうね。いると思う人もいるし、いないと思う人もいる。でも、私はいるように思えてならないのよ」

「でも」僕は静かに言った。「いても何もしてくれないよ。そんなに暇じゃないだろうし、そもそも人間に関心があるとは思えないし」

薄い唇から貝殻の様な前歯が零れた。優しい瞳を瞬いた彼女は、「智也はリアリストね。でも、私はいると思うわ。だって、こんなに幸せでいられるのだから」と言った。

舞。彼女は幸せなのだろうか？

僕は考えてしまう。純白の世界に生まれた彼女は今、幸福と言えるのだろうか？ たくさんのことを我慢して、痛みや、不安と闘って。いつも穏やかに笑っているけれど、時々舞が夜中に胸を押さえて苦しさに耐えているのを知っている。それなのに幸せなのだろうか？

けれど、彼女は僕の隣で笑う。

だから、この人は本当に強いんだな。そう思った。

天井の上。強い風が屋根を撫でるように音を立てて過ぎて行った。本当に今日は風が強い。カタカタとステンドグラスが微かに揺れて、髪に移った七色がざわめいた。

「ねえ、智也」僕の瞳を覗きこんだ舞は、「私たち別れましょう」と静かに言った。

蠟燭の炎が揺れた。

「私の命はそんなに長くないわ。私が死んでしまったら、あなたは一人になってしまう。だから、もう終わりにしましょう」

「そう・・・」

僕は彼女の言葉が突然過ぎて、何を言っているのか理解できなかった。ステンドグラスを見つめながら、何度も反芻する。

「私は智也に色んなものをもらったわ。もう、あなたにももらった幸せで、残りの人生はやっていける。苦しくても、痛くても、我慢できる。だから、終わりにしましょう」

いつものたわいもない会話をする時みたいに話すから、その言葉を飲み込むまでに時間がかかった。

誰と、誰が別れるんだ？ 別れるって、どういうことだろう？

弾かれたように舞の両肩を掴んだ僕。その強さに彼女が眉を寄せたのが分かったけれど、それを顧みる余裕はなかった。

「それって、どういうこと？ ちょっと意味が分からないんだけど」

自分でも分かるくらい慌てている僕とは違って、舞は落ち着いた声で、

「私はもう長くないみたいなの。こんなのが自分勝手だって分かっているんだけど、私は智也を愛しすぎたし、あなたも私を愛しすぎてしまった。今距離を置かないと、私がいなくなった後、あなたは駄目になってしまっんじゃないかって」

「そんなことはどうでもいいよ！」

叫んだ声が天井に反響する。彼女の言葉の切れ端を理解し始めた僕は、唯、何を間違えたのか考え始めた。

「何？ 僕のことを嫌いになったの？」

「そうじゃないのよ。智也が好きだから終わりにするの」

教え諭すような舞の口調に、苛立ちを感じ始める。

「分からないよ！ そんなの。どうして急にそんなこと言うの？」

「急じゃないのよ。もう、ずっと前から考えていたことなの。私が死んでしまったら、あなたはどうかやって生きていくの？ そのことを真剣に考えたことがあるの？ 智也は本当に優しいけれど、優し過ぎることは危ないのよ。どこまでも相手との結びつきを深めてしまふ。だから、失った反動が大きい」

「そんなことない！ 僕は大丈夫。だって、だって・・・」

「分かって、智也。私は大きな病院に入り直すことにしたの。だから、これからは会えないし・・・」

「いくら遠くても僕は通うよ。大丈夫だよ。大学の講義だってうまく予定を組めば、毎日だって通えるはずだし」

「智也」彼女は優しく囁く。「そうじゃないのよ。私はいなくなるのよ。最初にあなを縛ってしまったのは私かも知れない。だから、こんな言い分は自分勝手だって分かっているわ。でも、あなたは前を向いて生きていかないといけないのよ」

「そんなの知らないよ！」

立ち上がった舞の瞳はどこまでも深く、優しく、もう、どんな言葉も届かないのだと分かってしまった。彼女は時々ごく頑固になるから、こうなったら僕が何を言っても無駄なのは分かっている

た。それでも、ここで引くわけにはいかない。

「舞と一緒にいられないのが僕の為なんて間違ってるよ。今更どうして」

大きな木の扉に手を掛けた舞は、風に髪をフワリと浮かせて、
「私があなを閉じ込めていると知ってしまったからよ」と言った。

カッン、カッン。

煉瓦の上をブーツが蹴る。彼女の背に向かって次々と言葉を投げるけれど、どれも一度固まった心を溶かすことはできなかった。西洋を想わせる街燈がどこまでも続く道。彼女のコートの裾を掴んだ僕は、かなり情けない奴だったに違いない。

「考え直してよ。こんなんじゃ、今すぐ僕は駄目になるよ」

必死だった。彼女が僕から離れてしまわないように。

「舞がいなくなるなら、どっちだって一緒じゃないか！ お願いだから、別れるなんて言わないでよ！ 姉さん！」

唯、必死だった。

振り返った舞は、変わらない優しい瞳から涙を流していた。僕らの間を冷たい風が通り抜ける。

「分かって」

涙と一緒に零れる言葉。

「死んでいく私に出来るのは、もう、これしかないの」

それは静かだが悲痛な叫びだった。

僕に背を向けた舞。

終わってしまう。そう思った。もう、彼女が僕にだけ向ける特別な気持ちは、堅い心の中に押し込められていた。

「どういうこと・・・」

突然、震える声が僕らの背後から聞こえる。

「姉さんって、別れるってどういうことなの？ 皐月くん」

街燈の下。紙袋を提げた七瀬が瞳を大きく開いてそう言った。

「どうして？ 片思いって言ったじゃない。別れるってどういうことよ？ それにどうしてその人のことを姉さんっていうの？」

七瀬に吐いていた嘘が頭を過る。動揺している彼女は、僕と舞を交互に見て、信じられないという風に、
「嘘、を吐いていたの？」と言った。

でも、僕は舞とのことで必死だったから、
「お前には関係ない！」と怒鳴っていた。

もう自分でもわけが分からなくなっていた。

『臯月くんは優しくない』

七瀬はそう言ったけれど、それは本当だった。僕はちつとも彼女の気持ちを思いやっていなかったし、そうする余裕もなかった。僕は優しくない。唯、自分のことしか考えていなかった。だから、こんな事になったのだろう。

「姉さん。お願いだからどこにも行かないでよ!」

「智也? この子は誰なの?」

一人、状況が分からない舞が七瀬を困惑して見つめる。

「ねえ、臯月くん説明してよ!」

僕に怒鳴られた七瀬が眉を寄せて詰め寄ってくる。でも、僕はそんな彼女を今までにないくらい疎ましく思った。悪いのは自分だといふのに。

「うるさい!」

七瀬の手を振り払って叫ぶ。彼女は一度、悲しそうに顔をしかめた後、すぐに怒りで顔を真っ赤にして、
「あなたは誰なのよ!」と舞に詰め寄った。

「えっ」

いきなり矛先が変わって、脅えたように胸の前で両手を組む舞。

怒りに我を忘れた七瀬が叫んだ。

「全部嘘だったのね！ みんな、みんな嘘！ 嘘つき！」

すぐに、しまった、と思った。

七瀬が舞の体を両手で強く押したのだ。

普通だったら何でもないことだった。でも、舞は極端に心臓が悪かったし、動揺していたのも影響したのかも知れない。その場ですぐにくずくまった彼女は耐えきれなかったのか、煉瓦に顔を打ち付けるようにして倒れてしまった。

「舞！」

「えっ？ ……何よ、それ……」

隣には真っ白な顔して瞳を見開く七瀬。今までの苛立ちが、急に冷えきった汗に変わっていく。それは彼女も同じだった。

「舞！ しっかりして！」

舞の全身から脂汗が流れ、額には前髪が張り付いていた。薄い唇は血の気をなくして細かく震え、うまく呼吸の出来ずに、苦しそうに空気を求めて咽を鳴らす。その姿はさっきまで僕らが持っていた強い感情が全て一瞬で消えてしまっくらい普通じゃなかった。

舞が壊れてしまう。そう思った。

「私・・・何もしてないよ。唯、ちょっと押しただけなのに」

「舞は心臓が悪いんだ！ 救急車を呼んで！ 早く！」

・・・って・・・え・・・。

ヒュ、ヒュウ、と咽を鳴らしながら、舞が僕を見つめる。苦しうに顔を歪めていたけれど、その瞳はとても優しいものだった。もし、女神というものがいるのなら、きっと彼女と同じ瞳をしているんじゃないか。僕はそう思った。

「何？」

「う、めん・・・ね」

「どうして？ どうして謝るの？」

「迷惑、・・・かけて・・・」

言い終わらないうちに咳き込みだす舞。仰向けに僕の腕の中で体を折って、苦しそうに額に汗を浮かべる。眉を寄せた顔は、びっくりするくらい真っ青になっていた。

「やっぱり・・・罰があたったのかな？」

それでも口を開こうとする舞を僕は遮ったけれど、左右にゆっくり首を振ると、

「私には過ぎた幸せだったから。愛してしまったのが・・・弟だったから。きっと罰があたったのかも、知れない」と言った。

「今、救急車を呼んでいるから、話さないで休んだ方がいい」

「私はどうしようもないくらい、あなたが好きなの」

「もう話さないで、分かっているから」

辺りを見回し、七瀬が携帯に向かって何かを叫んでいる姿を確認した。まだ助けは来ないのだろうか？　じりじりと心を焼いていく焦りに苛立ちを感じる。

「智也」

「・・・」

「お願いだから話を聞いて」

「・・・」

「ねえ」

飴色の瞳の奥が濁り始めて、彼女の体から力が抜け始めたのが分かる。仕方なしに頷いた僕の頬に人差し指を這わせた舞は、

「こんなことになるなら、勇気を出して別れるなんて言わなければ良かったね。あなたを傷つけたのに、意味がなかったね。ごめんね」と言った。

「そんなことないよ。僕が駄目だから、僕がすっかりしていないから、だから舞に言わせてしまったんだ。舞が謝る必要はないんだ」

ありがとう。

舞は素直に頷いた。

残された時間はもう少ない。彼女は壊れてしまったのだから。それは取り返しのつかない誤ちで、とってはいけない積み木のピースをはずしてしまったように、止めどなく命の欠片が崩れ落ちて行く、流れていく。助けはまだだろうか？ 焦れば焦るほど、時間が伸びていくみたいだった。

「ねえ、智也」

「何？」

優しい鉛色の瞳が僕を見つめていた。

「私は天国に行けるのかな？」

ハッとして僕は舞に訊く。

「天国？」

「うん、天国に私は行けるかしら？」

アルトの声がそう囁く。

「天国なんて言ったら、まるで……」

「もしも、の話よ。でも、やっぱり私には無理かなあ」

姉弟で愛し合っているから……。彼女はいつもそのことを気に

していた。自分のせいで僕まで地獄に落ちてしまっんじゃないかって。でも、もし舞が天国に行けないのだとしたら、こんなに魂の美しい人が行けない場所なら、天国と言うところに行ける人はいないのかもしれない。

「智也はどう思う?」と掠れる声で訊く。

「僕は天国なんてないと思うけれど、舞なら行けるよ」

「そうかな」

「うん」

「そうだと良いな」

「もし、舞がいけなくても僕がいるから」

「智也が?」

「うん。舞がもし天国に行けなかったら僕の翼を貸してあげるよ。だから絶対に大丈夫」

「翼、持つてるの?」

「さあ、一つぐらいあるんじゃないかな、こんな僕でも。だから、僕のと、舞のを合わせたらいけるかもしれないよ、天国。・・・約束ね」

「約束?」

「そう」

「そっか、そしたら私は智也を迎えにこないとね。じゃないと智也は天国に行けないもの」

「そうだね」

クスクスと静かに彼女は笑った。

「でも、天国で神様に会ったとしても、文句を言ったらダメよ」

「それはその時に考えるよ」と僕は言った。

彼女は智也らしいね、と瞳を細めた後、体を小さく振寄せた。

冷たい風が丘の向こうから吹いてきて、どこか遠くの街へと去っていく。

「智也の腕の中、あったかいね」

「そう?」

「うん。少しだけ、寝てていいかな」

どこか気だるそうに舞がそう言った。

「そうだね。少しだけなら」

「うん。ありがとう、智也」

フツと瞳が笑う。

「・・・うん」

「ありがとう」

そう言った彼女から、全ての力が抜けたのが分かった。僕の腕の中で舞がびっくりするくらい重たく感じる。だから、死んだ人間は重くなるなんてことを思い出して、どうしようもなく悲しくなった。彼女は死んでしまったのだろうか？

遠くの方で七瀬が携帯に向かって何かを話しているが見える。ところどころ通行人が僕らの方に好奇の目を向け立ち止り始めた。

「ねえ、舞。あんまり寝すぎたらいけないよ。風邪を引いちゃうからね」

真つ暗な空には金色に輝く月。人間の全てを見てきた光は、僕らを見て沈黙する。

重力に何の抵抗もせず、彼女の手が煉瓦に落ちた。僕は慌ててそれを包み込む。結構激しくあたったから、舞が起きるんじゃないかって思ったけれど、穏やかに閉じられた瞼は少しも動かなかった。

ちらほらと僕らを囲み始めた人垣から、一人の男性が目の中に膝を折った。彼は素早く舞の手首をとり、瞼を指先で押し上げると、僕の顔をジッと見つめて言った。

「彼女は死んでいるんじゃないか？」

「え？」

彼の厳しい声が辺りに向かって飛び、それを合図に動き出す人たち。遠くの方でサイレンの音が聞こえて、辺りが騒がしくなっていた。

「ねえ、舞。君は死んでしまったんだね」

彼女を抱き抱えたまま、僕は月を見上げた。漆黒の夜空に星はなくて、厚い雲が頭上を覆い始めていた。強い風が通り過ぎる。

「僕は一人になってしまったよ」

ポロリと言葉が煉瓦に零れた。拾ってくれる人が誰もいないから、寂しそうに耳に転がる。

舞の穏やかな顔を見ていたら、軽く体を揺さぶったら眼を開けるんじゃないかって思ったけれど、バランスを失った小さな頭が栗色の髪を波打たせながら、ガクリと垂れて動かなくなったから、僕は彼女がもう二度と目覚めないことを理解する。良く知っている甘い香りが辺りに広がった。

「ああつ・・・」

小さな嗚咽が体の底から湧きあがって、開いた目から涙が溢れ出した。膨れ上がる悲しみに呼吸が苦しくなあって、胸を掻き毟りたくなった。現実を理解が追いついた瞬間、僕の体の芯は悲しい声で埋め尽くされてしまった。

「誰か！ 誰か、助けて下さい！」

人垣に向かつて叫んだ。気の毒そうに目を反らす人や、好奇心からその場に留まる人が随分と遠くに見える。

「早く、舞を」

月に向かつて叫んだ。厚い雲のせいで濁った力のない光が僕を見つめ返してくる。その近くには一つも星が出ていない。

「舞を助けて下さい！」

その願いが叶うのなら、本当に死んでも構わないと思った。でも、彼女を助けることは誰にも出来なかった。そう、誰にも。

「助けて下さい・・・助けて・・・」

煉瓦に顔を擦りつけて、僕は願った。飴色の優しい瞳は瞼に確りと隠され、腕の中に抱えた体温は冬の空気と変わらなくなりつつある。失われていく彼女の存在を僕はどうにか繋ぎとめようと必死に助けを求めたけれど、零れる命を繋ぎとめることは無理みたいだった。

それでも僕は泣きながら言った。

「舞を、助けて・・・助けて」

愛する人を助けてくれ、と。

もう、僕にはどうすることもできないから・・・舞を助けてくれ

と、願った。

二月の寒い夜。冷たい風が吹く誕生日に、彼女は死んだ。

? new world (1)

::

沈黙を纏った冷たい冬の空気に向かって、僕の話に耳を傾けていた舞がそつと息を吐きだす。気が付けばステンドグラスの外がうつすらと明るみを帯びて、差しこんできた薄藍色の光が蠟燭の炎を薄めていた。クリスマスの夜が明けようとしていた。

「それが私の最後なのですね」

「うん」

飴色の瞳が悲しそうに揺れて、繋いだ手を確りと握る舞。

「あなたはそれからずっと独りだったのですか？」

たぶん彼女は心配しているのだろう。あの日言ったように、自分が居なくなつて、星が月を失ったように僕が迷子になったんじゃないかと。

僕はその問いには答えずに、

「約束を果たせて良かったよ」と微笑した。

「約束・・・」

「そう。舞が天国に行けるように、僕の翼をあげるって約束。ずいぶん遅くなつてしまつたけれど、果たせて良かったよ。でも、君のその様子を見ると、必要はなかったかな？」

舞が死んでから十五年が経ってしまった。僕はとつくに三十を過ぎて、もう若いとは言えない。でも、彼女はあの日と変わらない若くて魅力的な容姿をしていたし、記憶にある通りの美しい魂をしていた。だから、僕はそう言った。

「そうですね。私のいた場所は確かに地獄ではありませんでした。でも、天国とも違いますよ。それはあなたも来れば分かることです」

「僕も、同じ場所にいけるのかな？」

不安に駆られて問いかけた僕に、彼女は優しく細められた瞳で、「もちろん。あなたがそれを望むのなら」と言ってくれた。

だから、懐かしいような、悲しいような、嬉しくて温かいけれど、どこか切ない。そんな気持ちになった。

「ずいぶんと僕は独りだったけれど、一人ではなかったよ」と、静かに僕は言った。

先ほどの舞の質問に対する答え。矛盾した言葉に、舞が「えっ」と訊き返す。

ステンドグラスから見える空が、時間のないことを教えてくれたから、

「僕の傍に君はいなかったけれど、僕の隣には色んな人が居てくれたから」と過去の話に戻る。物語の続きへ。

「そうですね。聴かせてくれませんか？ あなたがどうやってこの場所に辿りついたのかを」

「うん。でも実はそんなに話すことはないんだけどね」と笑う僕。

「それでも訊きたいです、私は」

僕の好きだった飴色の瞳が優しくそう言っで、やっぱり舞は変わらないなと思った。

「そうだね・・・」

辺りが薄明りに包まれ始めていた。空は朝の光をぼんやりと映し、心なしかステンドグラスの光も明るくなったように思えた。あと少ししか彼女と居られる時間はない。だから、出来るだけゆっくり時間が過ぎることを僕は願いながら、彼女に話を聞かせる。

クリスマスの夜が終わろうとしていた。

::

? new world (2)

直接腰を下ろした砂浜は、思ったよりも堅い感触だった。ざらざらとした荒い粒子が手のひらに付き、投げ出したジーンズの裾に纏わりつく。試しに人差し指で表面をなぞると簡単に線が引けて、なのに少しも柔らかくないのを不思議に思った。優しい波が満ち引きを繰り返す。

「久しぶり・・・だね」

隣に座る七瀬がそう言った。

「うん。一年・・・になるかな？ つい昨日のことみたいに思えるのに、もうそんなに経ってしまったんだね」

僕にはちつとも悪気はなかったけれど、彼女はすまなそうに俯くと、

「ごめんね」と小さく言った。

舞が死んでから一年が経った。直ぐに春がやってきて、夏になり秋が過ぎて、気付くとクリスマスに街がにぎわっていた。あちこちが不思議な幸せに満ちていて、小さな教会の周りでは慎ましく聖夜が祝われている。

「七瀬のせいじゃないから、だからもう忘れてもいいんだよ」

金色の月の光を浴びて、キラキラと輝く漆黒の髪。ポニーテールにするにはずいぶんと長くなったそれを、彼女は緩く胸の辺りで一つに結んでいた。短いスカートからは形のいい足が伸びて砂を小さ

く搔く。

「でも、舞さんを殺したのは私だから。ずっと忘れることはできないよ」

僕は膝を抱えた七瀬を見つめて、ゆっくりと溜息を吐く。

「仕方なかったんだ。皆がそう言っただろう？ 七瀬が殺したなんて誰も思っていないよ」

「でも」と小さな声が悲しそうに、「私のことを恨んでいるでしょう？ いいえ、恨んでくれないといけないわ。私は皐月くんの大事な人を奪ったのだから」と言った。

たぶん七瀬は僕に責めて欲しいのかもしれない。誰もが慰めの言葉を掛ける中、彼女自身が一番自分を責めているから。けれど、あの日のことを悔やんでいるのは誰よりも僕なのだ。だから七瀬の気持ちは痛いほど良く分かった。

「もういいんだ。今更舞が戻ってくるわけじゃないし、彼女は許してくれると思う。結局自分を責めても、それは自己満足でしかないんだよ」

「・・・自己満足？」

「うん」

僕は頷くと彼女の瞳を覗きこんで出来るだけ優しく言った。

「舞が死んで、僕は泣いたり、怒ったり、呪ったり、呻いたりした

んだ。・・・それはもう、自分の中にこんなに激しい感情があったことにびっくりするくらいにね。だけど、それで変わったことは何もなかった。そして、気付いたのは舞が居ればそんな僕を怒るだろうこと。だから、僕は舞の為に苦しんでいたわけじゃなくて、自分の為に泣いていたんだよ。きつと七瀬のそれと同じだと思う」

考え込むように自分の足の先を見る七瀬。一定の間隔で打ち寄せる波が細かい粒を飛ばしながら、泡を立てて引いて行った。水面には月が作った光の道が揺れる。

「そう。皐月くんがそう言うのなら、そうなのかもしれないね」

「うん」

あの日、僕がほんの少しだけ自分の気持ちを抑えることができたなら、舞は死ななくて良かったのかもしれない。そう思って随分と自分を責めて来たけれど、彼女は帰ってこなかった。狭い部屋の中で、一人空を眺めて後悔と懺悔を繰り返したけれど、それは意味のないことだと分かってしまった。段々と薄れていた彼女の香りが、終に消えてしまった時に・・・。

綺麗な横顔で七瀬が訊く。

「これから、どうするつもりなの？」

押し寄せる波が静かに引いて、湿った砂が月の光に煌めいた。

「そうだね。僕は色々な国を旅しようかと思う。それが舞の夢だったし・・・。そして、いつかこの街に、彼女との思い出の詰まったこの場所に戻ってこられるようになればいいと思うんだ」

「そつか。じゃあ、暫くお別れなのね」

「うん」

寂しそくに伏せた睫毛が銀色に輝く。

たぶん二人とも分かっていた。この別れは暫くではなくて永遠になるんじゃないかって。それでも、いつかこの世界のどこかで七瀬と顔を合わせることがあるなら、笑顔で言葉を交わせればいいと思う。心に痛みを感じながらじゃなくて、懐かしくて切ない想いに胸を躍らせながら。

「なら、私は行くよ」

そう言って立ち上がった七瀬の髪から、潮の香りが微かにした。海岸線に並ぶ閑静な住宅から漏れるイルミネーションに照らされて、形の良い瞳の奥が輝く。

「そつ。じゃあ、また」

軽く手を挙げて見せる僕。

「うん。また」

七瀬は踵で大きく砂浜に足跡を残したかと思うと、一度も振り返らずに海を後にした。砂を掻く音が足跡と共に遠ざかって行く。

ザザァン・・・。

押し寄せる波が背中ではたき、幾つもの気泡が満天の星の下ではたき。欠けた処のない月が透明な色で彼女を包んでいた。

『さようなら』

こんなに綺麗な場所にその言葉は似合わないから、代わりに僕は小さく手を振った。少しだけ大人びた後姿に向かつて。

? new world (3)

「それで」と白み始めた空気に向かって舞が言った。

クリスマスの夜は過ぎ、既に『夜』と呼べる時間は終わりを迎えていた。新しい朝の太陽が徐々にこの街を照らし始めている。左右の壁に設けられた蝋燭はすっかり小さくなっていて、弱い炎を揺られているだけだ。

「あなたはずっと色んな国を旅して来たのですか？」

「うん。寒い国、温かい国、自然の多い国、少ない国、食べ物のおいしい国、食べ物がろくにない貧しい国、人の優しい国や冷たい国・・。本当に色んな国へ行ってきたよ」

繋いだ手。指先を撫でるようにゆっくりと離して、彼女が立ち上がった。そして、コートの端を浮かせて僕に向き直ると、

「どの国が一番良かったですか？」と訊いた。

「どの国も良かった。でも、やっぱり僕の居場所ではなかったと思う」

「そうですね」

分かっている、というように彼女は小さく、でも確りと頷いた。

「思い出してくれた？」

僕の微笑に応えるように切なく目じりを下げて、

「ほとんど。あなたの話を聞いて・・・もうほとんど思い出してしまいました、昔の記憶を。私の居場所は智也の隣。そして、智也の居場所も私の隣です」と言った。

一步、一步、タイルを彼女が踏むたびにその音が天井に響いて繰り返される。遠ざかっていく足音。それは本当にゆつくりと少しずつだったのに、確実に扉に向かって伸びて行く。だから、一夜限りの舞との再会がもう終わるのだと分かった。

「智也？」と彼女が訊く。

「あなたは幸せだったかしら？ 私と一緒にいて」

僕はゆつくりと立ち上がって、

「もちろん幸せだったよ。今は君を失ってしまったけれど、それでも君に出会わなければ良かったと思ったことはないよ」と言った。

鉛色の瞳が小さく瞬きを繰り返して、僕をジッと見つめる。朝の光が長い睫毛に沿って揺れるから、彼女が泣いていることを知ってしまう。僕は手に力を込めて、この瞬間を心に焼きつけようとしていた。薄明かりを受けた髪を、切なそうに伏せられた瞳を、薄い唇を、桃色に染まった頬を。

「ねえ、智也？ あなたは奇跡がないと、まだ思っているのかしら？」

いたずらっぽく笑って見せて、なのに震える声でそう聞く。

「『ない』と、言いたいところだけれど、あるのかも知れないと言った方がいいのかな」

クスクスと嬉しそうに声を上げた彼女。

「智也らしい答えだわ」

「うん」

「なら、智也は世界が明日終わってしまうとしたら何を願う？」

扉の前で足を止めた舞は、真剣な顔になってそう言った。

「舞の幸せを望むよ」

「明日世界が滅びてしまうのに？」

「そうだよ。他に臨むことは何もない。舞は？」

「そうね。私も智也の幸せを望むわ」

「明日世界が滅びてしまうのに？」

「そう。私が智也を幸せにしてあげられるようにね、望むの……」

「二人がお互いの幸せを願っているのだから、きっと……」と僕が言った。

その後を引き継ぐようにして、

「私たちは幸せになれるわ」と舞が微笑する。

クリスマスの夜はすっかり明けてしまった。彼女が手を掛けた扉

から漏れる朝の光が、ゆつくりと冷たい空気と一緒に湿った煙の匂いのする教会に流れ込んでくる。七色の光が僕の背中に強く煌めいて、彼女の影がゆつくりと外の世界に消えて行こうとしていた。

「愛してるわ。智也」

アルトの声がそう言った。応えるように確りと頷いて見せて、
「愛しているよ。舞」と僕は笑った。

重たい木製の扉が唸り声を上げながら大きく開き、一瞬のうちに冬の空気が頬を駆け抜ける。朝の光の中に掠れて行く舞の影をジッと見つめながら、僕はまた訪れた二度目の別れに目頭が熱くなった。

「智也・・・」

彼女の声が聞こえたような気がして返事を返そうと口を開いたけれど、開かれたままの扉の外にはもう舞はいなくて、唯、朝の街がひっそりと佇んでいるだけだった。

教会と、僕と、ステンドグラス。

天使になった舞は、朝の光に溶けて行った。

? love song for my angel

彼女のいなくなった教会は随分と静かだった。自分の息遣いが高い天井に反響して、いつもより大きく聞こえる。踏み出したタイルの上。足を進めるたびに冷たい光の中を嬉しそうに音が駆けて行った。

舞との再会。そんな機会が訪れるなんて、普通なら思いもしないだろう。でも、どうしても僕はこの街に戻ってきた時から舞の気配を感じていたのだ。二人で行った喫茶店のカウンターに、彼女が好きだった雑貨屋のウィンドウに、そして小さな道端の花を見て喜ぶ影に目を擦ったり。だから、教会で舞の姿を見つけた時、僕は何故だかあまり驚かなかった。そこにいることが最初から分かっていたみたい。

「あれ？」

大きな扉を後に外に出ると、パラパラと柔らかい物が顔に当たって解けていった。見上げると、朝陽のせいで金色になった雲と冬特有の高い空があつて、ゆっくりと舞う白い結晶が天使の羽見たいにヒラヒラと・・・。

『きっと、今、私たちの上を天使が通っているの』

そう言った舞の言葉を思い出した。

だからかも知れない。

僕は大きくて綺麗な翼を広げた舞がこの空を飛んでいるような気

がした。キラキラと輝く真っ白な雪を降らせながら。

十二月二十六日。枝を剥き出しにした樹木が寒さに体を揺らして、教会の高い鐘楼が今日の始まりを告げる。止めどなく降り積もる天使の羽はこの街に幸せを運び、僕の頭に、肩に、手の平に、足に、静かに留まって止まなかった。

きっと、この街は、今世界で一番幸せな場所なのかも知れない。

階段に腰を下ろして朝陽を眺めながら、僕はそう思えてならなかった。

f i n

? love song for my angie (後書き)

長らくお付き合いありがとうございました。感想やアドバイス等ありましたら、教えていただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3923u/>

天使に愛の歌を

2011年12月29日18時48分発行